

愛知県東海市

畑間遺跡発掘調査報告

2004年

愛知県東海市教育委員会

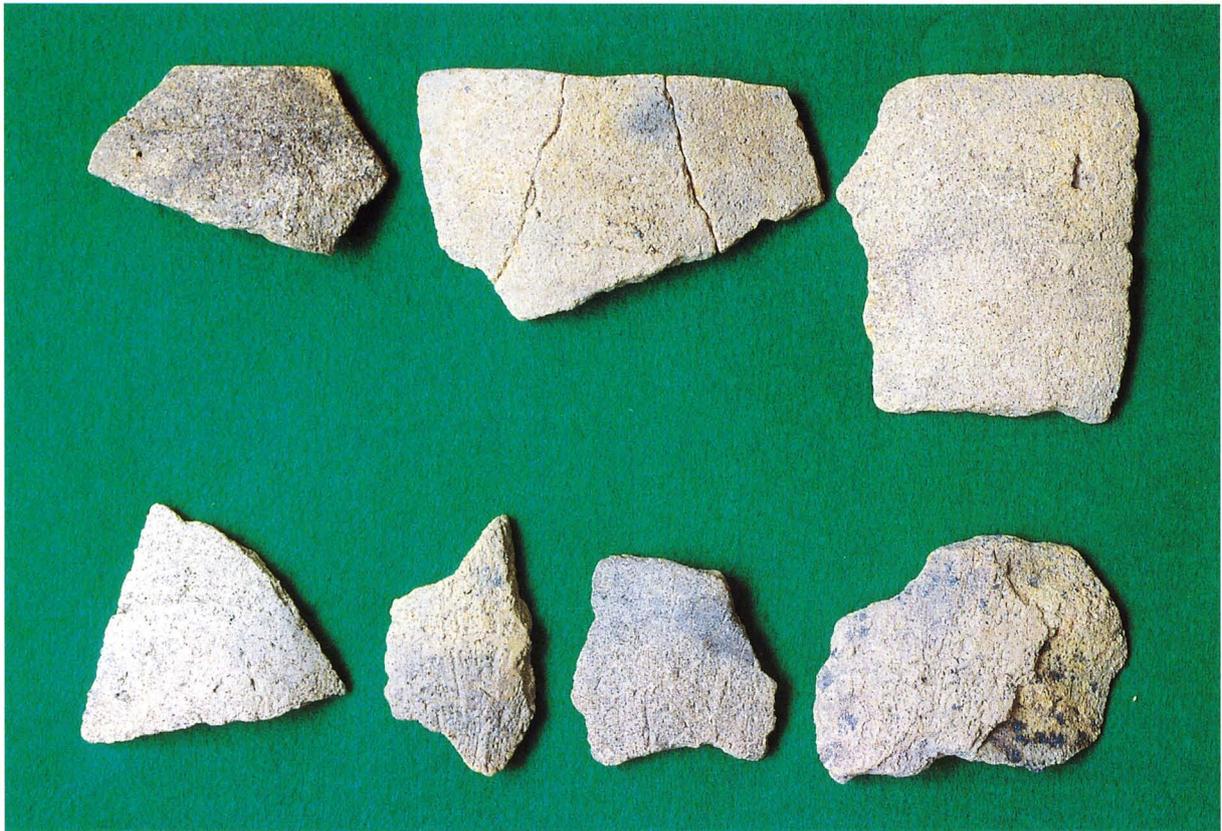
愛知県東海市

は た ま

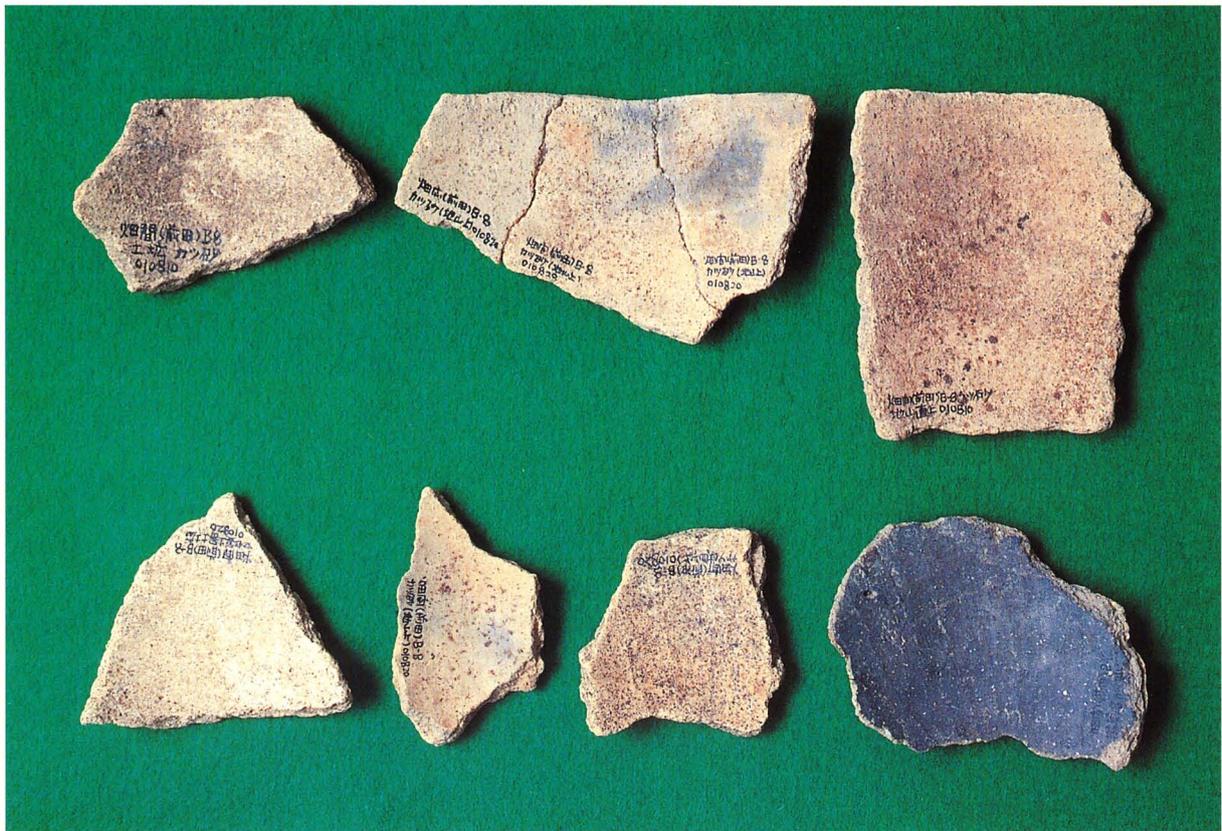
畑間遺跡発掘調査報告

2004年

愛知県東海市教育委員会



弥生時代前期後半の無紋粗製小形平底深鉢形土器の口縁部破片（外面）



弥生時代前期後半の無紋粗製小形平底深鉢形土器の口縁部破片（内面）



弥生時代前期後半の無紋粗製小形平底深鉢形土器の底部破片（外面）



弥生時代前期後半の無紋粗製小形平底深鉢形土器の底部破片（内面）

目 次

第1章 調査の経緯と遺跡の概要…………… 1	(2) 弥生時代中期
第2章 調査の成果	弥生時代終末～古墳時代初頭
第1節 遺構…………… 2	(3) 古代
1 弥生時代の土坑 (SK1・SK2)	(4) 中世
2 戦国期の貝層を伴う土坑 (SK3)	(5) 戦国期～近世
第2節 遺物	(6) その他 (瓦類・製塩土器など)
1 土器…………… 4	2 石製品…………… 6
(1) 弥生時代前期	3 その他の遺物…………… 7
ア 条痕紋系土器	第3章 まとめ…………… 8
イ 無紋粗製小形平底深鉢形土器	付表・図版・報告書抄録

図版目次

図版1 遺構等配置図、貝層断面図	図版9 弥生時代～古代の土器 実測・拓影図
図版2 条痕紋系土器 拓影図	図版10 中世の土器 実測・拓影図
図版3 条痕紋系土器等 拓影図	図版11 戦国期～近世の陶器類 実測・拓影図
図版4 条痕紋系土器等 拓影図	図版12 戦国期～近世の土師質土器 実測図
図版5 無紋粗製小形平底深鉢形土器 拓影図	図版13 土師皿・瓦・石製品 実測・拓影図
図版6 無紋粗製小形平底深鉢形土器 拓影図	図版14 遺構写真 (調査区全景・SK2検出状況)
図版7 無紋粗製小形平底深鉢形土器底部 実測・拓影図	図版15 遺物写真 (条痕紋系土器・須恵器)
図版8 無紋粗製小形平底深鉢形土器底部 実測・拓影図	

挿図・表目次

第1図 畑間遺跡位置図…………… 1	表 貝類組成表…………… 2
第2図 貝層サンプリング地点…………… 2	付表 無紋粗製小形平底深鉢形土器観察表
第3図 SK1・2 平面・断面図…………… 3	
第4図 貝層断面写真…………… 3	
第5図 土製品・石製品・銭等 実測・拓影図…………… 7	
第6図 畑間遺跡の立地と周辺の遺跡…………… 10	

第1章 調査の経緯と遺跡の概要

遺跡の概要 畑間遺跡は知多半島の中でも広い面積をもつ伊勢湾岸の海岸平地のうち、東海市域の中央を流れる大田川左岸の標高3～4 mの高まり(砂堆)上に位置する。近接する東畑遺跡も含め、主に弥生時代前期～中世にかけての集落跡である。大田川を挟んだ対岸には松崎遺跡などの大規模な古代製塩遺跡が所在する。

今回の調査区域は畑間遺跡が立地する砂堆の西端にあたり、旧海岸寄りに位置する。

調査の経緯 東海市では、市の鉄道交通の中心である名古屋鉄道太田川駅周辺を市の表玄関にふさわしい中心市街地として整備する目的で、太田川駅周辺土地区画整理事業を実施している。

平成8年度には、区画整理区域内の埋蔵文化財の所在、範囲を確認するため、試掘調査を実施しており、その調査結果から開発等と調整し、この区画整理事業に伴う、道路用地の発掘調査を平成11年度から実施している。

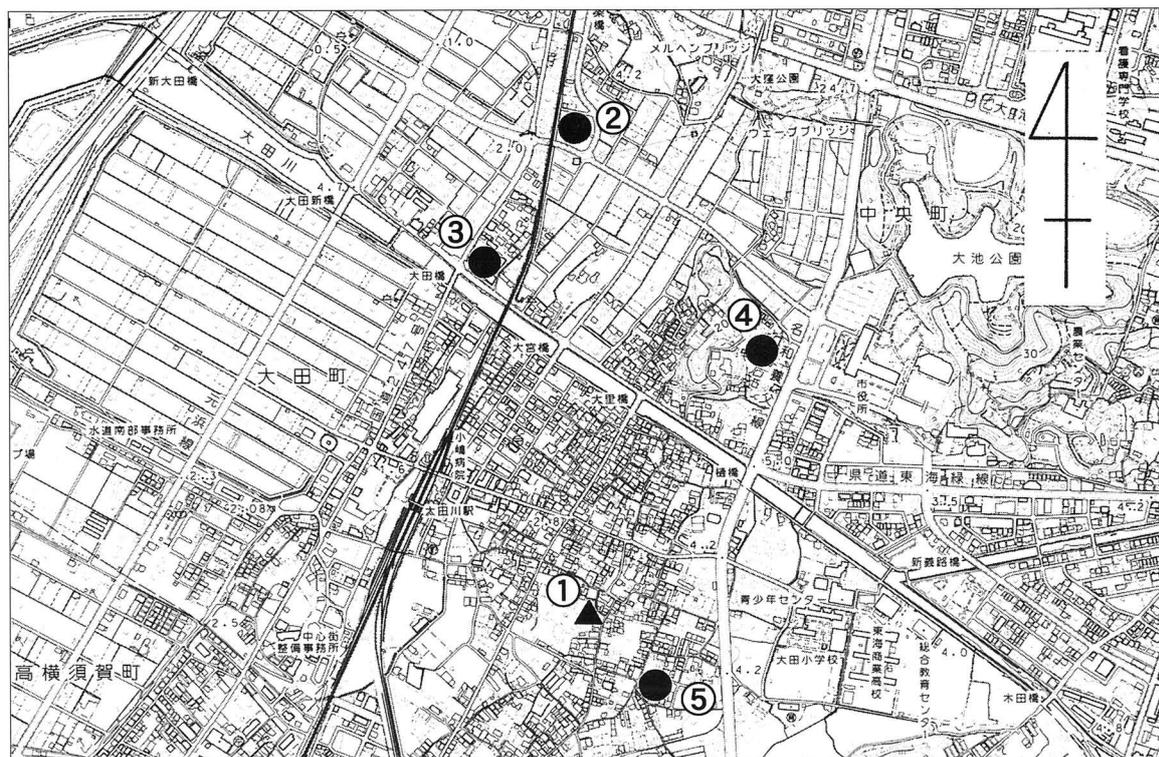
今回報告する調査区域は、6 m幅の区画街路整備に伴うものであり、工事着手前の平成13年度に埋蔵文化財包蔵地にあたる250㎡の発掘調査を行った。

調査の概要 現地調査は、平成13年(2001年)7月4日から8月29日にかけて東海市教育委員会

が実施した。7月11・12日に重機を使用して表土除去を行った。表土の厚さは様々だが、約20～30 cmの耕作土、無遺物層を除去した。調査区西端は、約30㎡ほど近代以降の攪乱を受けていた。その後7月17日から手掘りによる下層の調査を行った。

調査は、調査区東側(ⅢG2g区)から順に西側(ⅡF18・19s区)へと進めた。ⅢG1e・f区で検出した、主に戦国期の遺物を含む貝層及びこの貝層の流れこみと考えられる破碎貝を含む遺物包含層(以下、破碎貝層)を30～70 cm掘り下げた。貝層及び破碎貝層の下層には、主に山茶碗等を含む層や須恵器・土師器を含む層が部分的に確認できる程度で、調査区全体で層序を確認することはできなかった。これらの層を除去した後、当初地山面として捉えていた面を精査したところ、ⅢG1・2のe・f区周辺で、この面に食い込むように弥生時代前期の条痕紋系土器や製塩土器と考えられる無紋粗製小形平底深鉢形土器の小破片がまとまって出土した。

今回の調査区域は西に向って旧地盤が低くなり、西端で急激に低くなることから、旧海岸線にあたると思われる。発掘作業は8月27日に終了し、翌28日と29日に重機による埋め戻し作業を行い、調査を終了した。



第1図 畑間遺跡位置図 1 畑間遺跡 2 松崎遺跡(古墳～古代製塩遺跡) 3 上浜田遺跡(古墳～古代製塩遺跡) 4 弥勒寺遺跡(戦国期寺院跡) 5 東畑遺跡(弥生～中世集落跡)

第2章 調査の成果

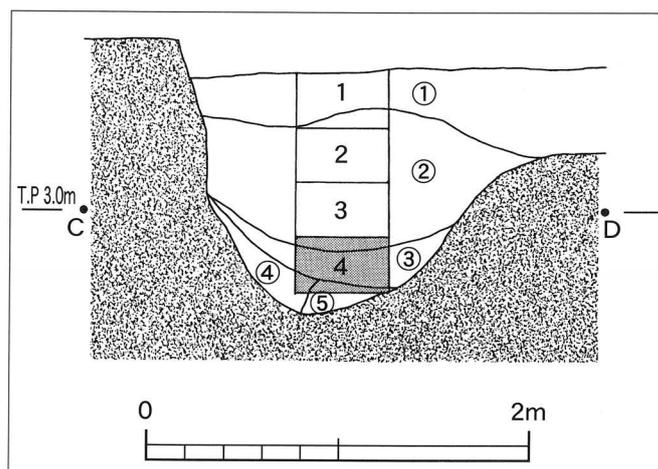
第1節 遺構

1 弥生時代の土坑 (SK1・SK2)

無紋粗製小形平底深鉢形土器出土の土坑

(SK1、第3図)

本遺構は、調査区東側 (ⅢG1・2のe・f区) に位置する。長辺2m、短辺1.2m、確認面からの深さ0.3mほどの不整形な楕円形の掘りこみである。土坑の床面から壁面に張り付くように黒色砂ブロックが分布している。床面直上では製塩土器と考えられる無紋粗製小形平底深鉢形土器の底部破片が数点出土している。この土坑周辺から同様の土器破片が多数出土していることから、本遺構は製塩に関わる遺構 (製塩炉?) の可能性もあるが、床面・壁面に被熱の痕跡がなく、灰や炭化物もほとんど検出されないため不明である。帰属時期については、無紋粗製小形平底深鉢形土器と伴出する条痕紋系土器から弥生時代前期後半 (樫王式期) と考えられる。



- ①混貝暗褐色砂 (破砕貝多い) ②純貝層
③混貝暗褐色砂 (砂多い) ④暗灰褐色砂
⑤混貝茶褐色砂

第2図 貝層サンプリング地点

パレススタイル土器出土の土坑

(SK2、第3図)

本遺構は調査区の南東隅 (ⅢG2f区) に位置する。長径1.3m、短径0.9m、確認面からの深さ0.4mほどの楕円形土坑である。床面直上からほぼ完形の赤彩が施された壺形土器 (図版9-224) と口縁部のみ残存する粗製の壺形土器 (図版9-223) が出土している。帰属時期については出土土器から弥生時代終末から古墳時代初頭ころ (廻間I式期) と考えられる。

2 戦国期の貝層を伴う土坑

(SK3、第2・4図・表・図版1)

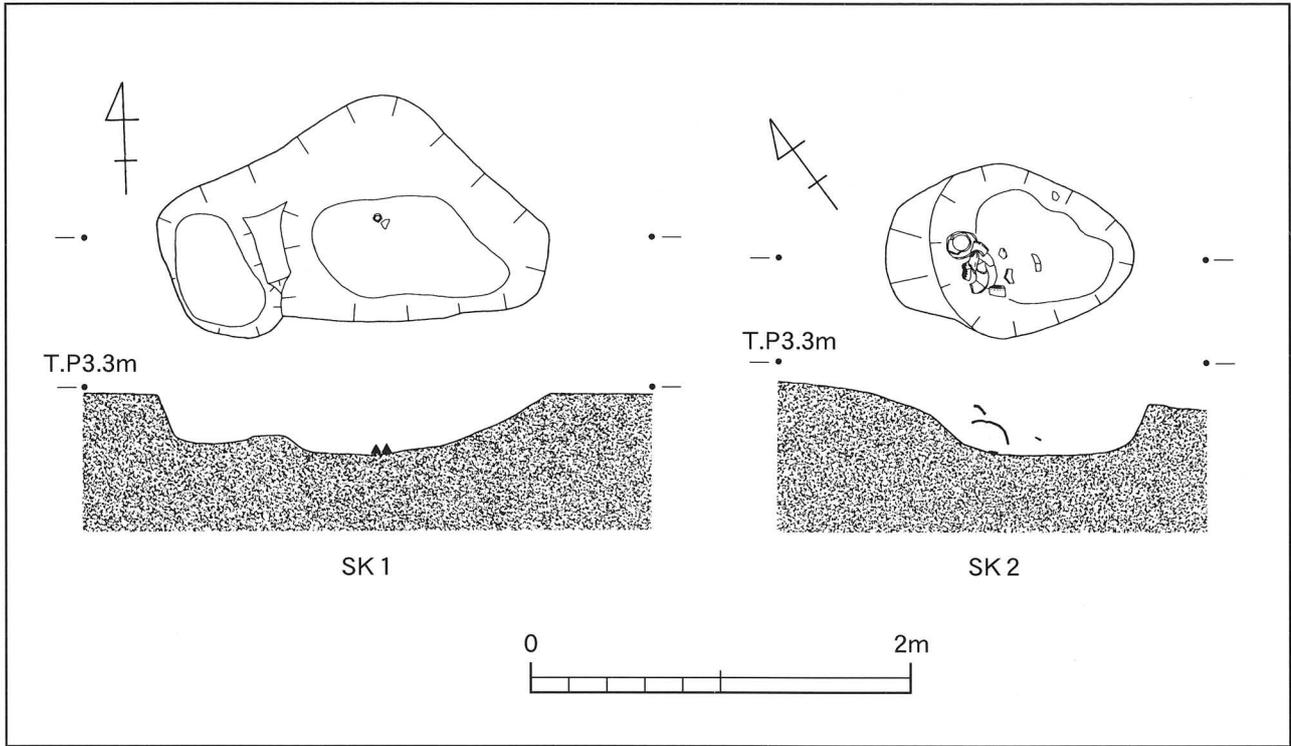
調査区域の東側 (ⅢG1e区) に位置し、北側が調査区域の境にかかるため、全体はつかめないが、短辺が約2m、長辺は不明だが、調査区北壁の断面でみる限り約11mである。確認面からの深さは約1mである。貝層を伴う土坑で、貝層中から16世紀頃の土師質の内耳鍋、羽釜 (図版12-296~298、301) が出土しており、同時期に形成されたものと考えられる。貝層の最下部でサンプリング (50cm×50cm×30cm) した貝類組成は、表のとおりである。

表 貝類組成表 (ブロック・サンプリング番号4)

種名	番号	4	
		個体数	%
斧足網	ハマグリ	887.5	12.3
	シオフキ	481.5	6.67
	マガキ	421.5	5.84
	サルボウ	103	1.43
	ヤマトシジミ	100.5	1.39
	アサリ	84	1.16
	オオノガイ	41.5	0.58
	フトオビクイ	2.5	0.03
	オキシジミ	0.5	0.007
	小計	2122.5	29.41
腹足網	ウミニナ類	4371	60.57
	フトヘナタリ	360	4.99
	ムシロガイ	192	2.66
	ギボシナガニシ	73	1.01
	マルテンスマツムシ	71	0.98
	タマキビ	13	0.18
	アカニシ	9	0.12
	キサゴ	3	0.04
	ツメタガイ	2	0.03
	小計	5094	70.59
計	7216.5	100	

微小貝＝腹足網・陸産

マイマイ科	39	50.65
キセルガイ科	38	49.35
計	77	100



第3図 SK1・2 平面・断面図 (1/40)



第4図 貝層断面写真

第2節 遺物

1 土器

(1) 弥生時代前期

ア 条痕紋系土器 (図版2~4)

条痕紋系土器の出土は、調査区の東側寄りのⅢG 1e、ⅢG 2e、ⅢG 2f区域に集中しており、後述する無紋粗製小形平底深鉢形土器と同じ範囲である。これらの土器に伴う遺構はなく、すべて、地山直上の包含層からの出土で、個体数も少ない。

深鉢

器面調整により①二枚貝（ふねがい科・アナグラ属の太い放射肋がある二枚貝）条痕によるもの（1~16・18~33・56~58・60~62、64・90・92・93）、②削り（削痕）によるもの（35~41・55・73~75・77・78・87・89）、③ナデによるもの（42~47・88・91）、④ヘラ磨きによるもの（48~54・76・79~81）に区分できる。口縁部は、わずかに内側にすぼむもの、そのまま立ち上がるもの、外側に開くものがある。内面はナデによっていねいに仕上げている。底部については丸底になるものがある。

口縁端部は、①二枚貝条痕によるものは、ナデ調整によって平坦に仕上げもの（1~12）、二枚貝の殻頂を押し付けてめぐらすもの（15・16・18・19）がある。13・14は他の明褐色・灰褐色系の色調とは異なり、白っぽい色調で、口縁部を厚く作り出し、13は内側にも、殻頂を押し付けてめぐらしている。指先を押し付けたようなくぼみをめぐらすもの（21~29）、腹縁がギザギザとなった貝の腹縁を押し付けてめぐらすもの（20）、沈線をめぐらすもの（30）、内側に沈線を引いてその下を突帯状につくりだすもの（31）、幅を厚くしてくぼませるもの（32）、刻みをめぐらすもの（56・57・58）がある。30~32は、胎土に砂礫が多く混じっている。33の縦の条痕は二枚貝とは異なる施紋具で弧線も認められる。②削り（削痕）によるものの口縁端部は、ナデ調整によって平坦に仕上げもの（35~41・54）、刻みをめぐらすもの（55）がある。③ナデによるものの口縁端部は、同様のナデ調整によって平坦に仕上げている（42~47）。42~44は、胎土に砂礫が多く混じり、口縁端部を幅広く作り出している。④ヘラ磨きによるものは、内外面と口縁端部もヘラ磨きによって仕上げている（48~50・52・53）。51は外面のみヘラ磨きで、内面と口縁端部はナデ調整である。

胴部 81は、内外面ともいねいなヘラ磨きを施している。底部片は少なく、丸底のものもある。87・89は削

って調整し、87は面取りをしたようになっている。胎土に砂礫が多く混じる。88・91はナデ調整、90・92・93は条痕である。

その他（34・59・63・82~86・94・95）

壺 34は、出っ張りの低い突帯紋をめぐらす。59は太い条痕である。63は胎土に砂礫が多く混じる。底部82・83・86は二枚貝によるとみられる条痕紋を施す。84はヘラ磨きを加える。85は削りの調整を加える。94は胎土に砂礫が多く混じり、口縁部が直立し、口縁の突帯に断面の丸い棒状具によって刻みを加える。鉢 95は浮線紋土器で内外面ともいねいなヘラ磨きを施している。

時期 以上の出土遺物には羽状の条痕がないことや口縁端部の処理などからみて、その年代は、檜王式から水神平式にかけての時期に相当し、檜王式の新しいもの（弥生前期後半に属す）としてとらえることができる（注1）。

イ 無紋粗製小形平底深鉢形土器 (図版5~8、附表)

土器の形態は、破片から推定復原すると、深鉢形である。口径は推定19cm±4cm、高さは推定25cm±3cmほどである。口縁部の厚みは5mmほどで、わずかに内に傾斜し、口端は平らで角ばっておわるもの及び丸みをもっておわるものがあるが、同一個体のなかでもそうした変化が認められ（97）、明確な区別があるものではない。底径は4cm前後で、底面が平坦なもの、円盤状に張りだして丸みをもつものがある。底面には平滑なもの（170・200）と砂（157・159）、礫（160・215）、植物繊維とみられるもの（201・206）の圧痕の付くものがある。

器体の厚みは、体部で5mmないし6mmの薄手で、底に近づくとも厚さを増し、底部中央の厚みは1.1cm~2.5cmで、1.2cm~1.5cm程のものが多い。内面の調整はよくなされ、下半部ははいねいなヘラ磨きが加えられている。

これに比べると、外面は調整が少なく、ナデ調整と下半部をヘラ削りするものがあり、口端部寄りには成形時の粘土の輪積痕が残っている。色調は明褐色が多く、部分的に灰褐色、黒色、赤褐色、灰色などに变化するものもある。また、破片は器壁にそって内側と外側にはがれるものがよく認められる。胴部中ほどから下半の部分は、よく火を受けたためか、細片化している。

底部を細かく観察すると、A=平坦ではみ出さないもの、B=わずかにみ出すもの、X=み出して上に折れ曲がるもの、Y=円盤状にはみ出すものがある。

A・B・X・Yのどのタイプにも、底面が平坦なものと丸みをもつものがあるが、概して、Yのタイプに底面が丸みをもつものが多くみられる。この丸みは、おそらく粘土がやわらかいうちに底面を下にして行った土器の整形、調整時に底面が支点となつてぐるぐる回されるなどして生じたもののようである。時期は、伴出する条痕紋系土器からみて檉王式から水神平式にかけての弥生前期後半に属するものである。

(2) 弥生時代中期、弥生時代終末～古墳時代初頭 (図版9)

弥生時代中期の土器(220、221)は、包含層中で出土しており、遺構に伴う資料ではない。220は深鉢の口縁部破片で、外面に横方向の条痕を施し、内面に刺突文を施す。221は肩部破片で、外面に暗文状の横線を施す、凹線紋系の壺である。220・221は高蔵期に属すると考えられる。

弥生時代終末～古墳時代初頭の土器は、包含層中から出土したもの(222・225)と土坑からまとまって出土したもの(223・224)がある。222は壺の肩部破片で、外面に櫛描による直線文と山形文を施す。223は広口壺の口縁部で、口径17.6cm。口縁端部にハケ状工具による刺突を施す。224はいわゆるパレス壺で、底部を欠くほかは、ほぼ完形である。外面胴部、内面口縁部に赤彩を施す。文様は、拡張口縁部に擬凹線文、棒状浮文を施し、肩部に櫛描による横線文、列点文、波状文を施す。225はS字甕A類で、口縁部に刺突文をもつ。222～225はいずれも廻間I式期に属すると考えられる(注2)。

(3) 古代(図版9)

古代に属する土器としては、須恵器(229～238)、土師器(226～228)、灰釉陶器(239)があり、いずれも包含層中から出土しているが、232・233・237の須恵器は地山直上でまとまって出土している。

231は合子型の坏蓋で、口径9.6cm。猿投窯編年の岩崎17号(I-17)窯期(7世紀末～8世紀初頭頃)に属すると考えられる。

229は甕の胴部破片で、外面にたたき目を有する。230は甕の口縁～胴部破片で、把手がつくと思われる。232は短頸壺の完形品で、口径7.2cm、器高5.8cm、底径5.2cm。233～236は坏蓋で、233・235は完形品である。いずれも外面天井部がヘラ削りで擬宝珠形をつまみをつける。口径は233が13.1cm、234が17cm、235が15.6cm。237は有台碗で、口径13.4cm、器高5.3cm、底径7.4cm。238は有台坏で、口径16cm、器高4.2cm、底径11.2cm。

226～228は土師器の甕で、外面胴部、内面口縁部

がハケ調整である。228の底部には木葉痕がのこる。226～230、232～238の須恵器はいずれも猿投窯編年の折戸10号(O-10)窯期(8世紀末頃)に属すると考えられる。土師器も同時期とみられる(注1)。

239は、灰釉陶器の皿で、口径14cm、器高2.9cm、底径6cm。猿投窯編年の折戸53号(O-53)窯期(10世紀前半頃)に属すると考えられる。

(4) 中世(図版10)

中世の遺物としては、常滑窯産の山茶碗(240～245)、山皿(246～257)、片口鉢(258)、羽釜(259)、壺(264)、甕(263)が出土したほか、北部系山茶碗(260・261)も出土している。いずれも包含層または、戦国期以降の遺構に混入して出土したものである。

山茶碗は、いずれも底部が糸切り底で、体部が直線的に立ち上がり底部との屈曲が明瞭である。胎土は、砂粒を多く含む粗雑なものである。山皿は、いずれも底部が糸切り底で、器高は2cm以下と扁平である。片口鉢は、口縁部の一面を外側へ拡張した注ぎ口をもつ。体部は直線的に立ち上がり、底部との屈曲が明瞭である。帯状の高台をもち、高台周辺の1段を回転ヘラ削りによって仕上げている。常滑窯産の山茶碗、山皿、片口鉢(240～258)については、常滑窯編年の5または6a型式期(13世紀中葉頃)に属すると考えられる(注3)。

259は常滑窯産の羽釜の口縁部である。小破片資料で鏝も欠落しており、全体の器形は不明だが、口縁部が直線的に内傾している点から、山茶碗等と同様に6a型式期前後(13世紀中葉頃)に属すると考えられる。

260・261は、北部系山茶碗である。胎土が緻密で、器壁が薄く仕上げられている。底部は糸切り底で底径は小さく、261は穀殻痕がつく粗雑な高台をもつ。美濃窯編年の大洞東1号窯期(15世紀前半頃)に属すると考えられる(注4)。

262は、小形の碗で、底部は糸切り底である。胎土、器形とも常滑窯産とは異なるが、産地・時期とも不明である。

263は常滑窯産の甕の口縁部破片である。口縁縁部が頸部に接し、折り返した部分に隙間が残る。264は常滑窯産の壺で、玉縁状に丸く折り返し、下端をつまみ出した口縁部をもつ。常滑窯編年の9型式期(15世紀前半頃)に属すると考えられる。

(5) 戦国期～近世(図版11～13)

戦国期～近世の土器は、陶器類(図版11 269～295)、土師質の鍋・釜類(図版12 296～302)、

土師皿（図版13 303～314）がある。285、296～298、301、303～305は貝層内からの出土資料で、以外は包含層または近世以降の井戸跡から廃棄された状態で出土した資料である。

269～292は瀬戸・美濃窯産陶器である。

285は皿で、口縁部内外面に灰釉を施す。古瀬戸後期頃（15世紀代）に属すると考えられる（注5）。

283・284は、端反皿で、内外面に灰釉を施す。大窯期（16世紀代）に属すると考えられる。

269～276は、天目茶碗で、口縁部の立ち上がりは長く、端部は緩く外反する。277～280は、瀬戸窯産の志野皿で、277・280の内面、底部に煤の付着がみられ、灯明皿として使用された可能性がある。269～280は江戸前期頃（17世紀代）に属すると考えられる。

281・282は鉄釉皿で、281は内外面に鉄釉を施し、内面に被熱の痕跡がみられることから灯明皿として使用された可能性がある。282は内面と外面上半に鉄釉を施す。江戸中期頃（18世紀代）か。289・290は播鉢で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部と体部との境に内外面とも段を有する。290の口縁部は折り返されたものであるが、289の口縁部は折り返されたものではない。290は藤澤分類のID2類、289はIE類に分類でき、江戸中期頃（18世紀後半）に属すると考えられる（注6）。

291は鉢で、焼成不良で釉薬が発色していないが、体部下半を除いて灰釉を施す。江戸前～中期頃（17～18世紀）に属すると考えられる。

292は、底部に煤が付着し、被熱の痕跡がみられることから、行平鍋と考えられる。体部は丸みを帯び、上半部は内彎する。口縁部は受口で、口縁部直下に注口と中空の把手がつき、体部下端に三足がつく。江戸後期頃（18世紀後半～19世紀前半）に属すると考えられる。

293は、急須で、産地・時期とも不明だが、19世紀以降の常滑産か。294は赤焼の鉢もしくは蓋とも考えられる。295は赤焼の火消し壺の蓋である。時期は19世紀以降と考えられる。

296～302は土師質の鍋・釜類である。296～298、301は貝層から出土したもので、以外は包含層から出土したものである。羽釜301は体部が半球形を呈する。口縁部は内彎し、体部に比べて厚手となる。300、302も同様の特徴をもつ。内耳鍋296～298も体部が半球形を呈する。口縁部は内彎し、体部に比べてやや厚手となる。羽釜、内耳鍋とも16世紀代に属すると考えられる（注7）。

299は羽無釜で、硬質である。口縁部は内傾し、肩部が張り、口縁部と体部の境が明瞭である。肩部には、平面形が五角形状の外耳が内傾気味に張りついている。底部外面はヘラ削り調整である。被熱の痕跡はみられない。江戸中期頃（18世紀代）に属すると考えられる。

303～314は、土師皿である。303～305は貝層から出土しており、以外は包含層からの出土である。303～310は、非ロクロ調整である。厚手で扁平なもの（303～306）、薄手のもの（307～309）、大形で比較的丁寧なつくりのもの（310）がある。311～314はロクロ調整皿で、314の体部内面には焼成後、円形に削られた跡がある。時期等は不明だが、303～305は貝層から出土しており、共伴して出土した内耳鍋、羽釜から、16世紀代に属する可能性がある。

(6) その他（図版10・13、第5図）

瓦類 265～268（図版10）、315・316（図版13）

いずれも包含層からの出土である。265は丸瓦で、凸面はヘラ削りによる調整を加え、凹面には布目痕が残る。266・267は丸瓦、268は平瓦で、凸面に縄目の叩き、凹面には布目痕が残り、端部にヘラ削りによる調整を加える。堅い焼成である。いずれも中世に属すると考えられるが265は古い様相をもつ。

316は軒丸瓦で左巻三巴紋に珠紋12個を配するものと思われるが、珠紋は欠落している。315は瓦の一種と考えられるが、詳細は不明である。形態からみて地葺瓦（平瓦）と棟瓦の間にできる隙間を埋める瓦と考えられる。

製塩土器 第5図1～11

調査区域に散在する程度で、包含層または貝層等に混入して出土している。いずれも知多式製塩土器4類に位置づけられる。

土錘 第5図12～15

土師質の管状土錘で、合計4点、いずれも包含層中から出土している。孔径は約0.4 cm、長さは約4 cm、最大径は約1 cmである。

陶丸 第5図16～20

出土した陶丸は合計5点で、貝層から出土した18以外は包含層からの出土である。断面が正円に近いもの（16・18～20）、やや楕円のもの（17）がある。

2 石製品

(1) 弥生時代（第5図21・22）

弥生時代のものとは判断できる石器としては、磨製石斧と石鏃が出土している。22は無茎の石鏃で、石

材はサヌカイトか（注8）。弥生時代前期後半の無紋粗製小形平底深鉢形土器が出土した土坑周辺の山直上から出土している。21は包含層中から出土しており、石材はハンレイ岩である。弥生時代前期に属すると考えられる。

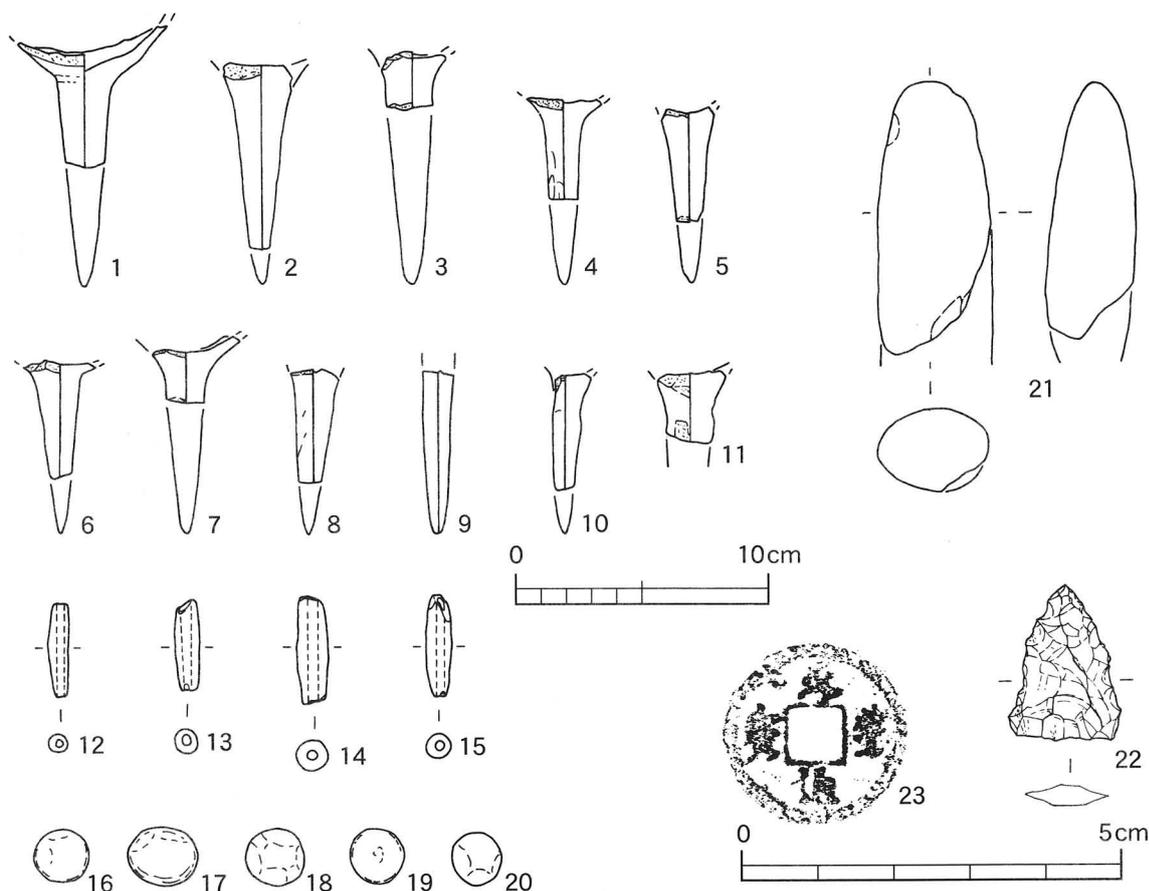
(2) その他の石製品 (図版13)

317~321は砥石で、貝層から出土した320以外は包含層からの出土である。317の石材は泥質凝灰岩で研磨面は5面、318は砂質凝灰岩製で研磨面は2面、319は安山岩製で研磨面は1面、320は凝灰質砂岩で研磨面は4面、321は砂質凝灰岩製で研磨面は3面である。砥石はいずれも中世以降のものと考えられるが詳細は不明である。322・323は敲石で、322は円柱上の両端に敲打痕が残存する。石材はチャートである。323は平坦面2面の中央に窪み状の敲打痕が残存する。石材は砂岩である。

3 その他の遺物 (第5図23)

いわゆる宋銭が包含層中から1枚出土している。元豊通宝（元豊元年=1078年初鑄）である。

- 注1 条痕紋系土器、古代の土師器、須恵器の帰属時期は永井宏幸氏（(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター）に御教示をいただいた。
- 注2 バレスタイル土器、S字甕の帰属時期は、宮腰健司氏（(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター）に御教示をいただいた。
- 注3 常滑窯産陶器の編年は、中野晴久1994「赤羽・中野『生産地における編年について』、『中世常滑焼をおって』資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所発行による。
- 注4 北部系山茶碗の帰属時期は、藤沢良祐1990年「付編1 瀬戸地方の北部系山茶碗窯」『尾呂』本文編 瀬戸市教育委員会を参考にした。
- 注5 戦国期~近世の陶磁器の帰属時期等については、松田訓氏（(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター）に御教示をいただいた。
- 注6 藤沢良祐1988年「本業焼の研究(2)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅶ』瀬戸市歴史民俗資料館
- 注7 戦国期~近世土師質鍋・釜類の帰属時期は、鈴木正貴1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラムを参考にした。
- 注8 石製品の石材は堀木真美子氏（(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター）に御教示をいただいた。



第5図 土製品・石製品・銭等 実測・拓影図 (22・23は原寸)

第3章 まとめ

本遺跡から出土した特殊な様相をもつ無紋粗製小形平底深鉢形土器が、製塩土器としてとらえられ、その時期が弥生時代前期後半に属することから、わが国の土器製塩に新たな展開を提示するものであり、本章では、この点についてふれたい。

製塩土器の証明 はじめに、この無紋粗製小形平底深鉢形土器が、製塩土器であるとする根拠について示す。

製塩土器の特徴について、近藤義郎先生の諸論考（注1）から次のように示すことができる。

1. 日用容器と異なった海辺における生産用具で、特殊な使用をされている。2. 海水を徹底して煮詰めており、そのことによる諸特徴が生じている。3. 製塩用土器として特殊化していることであり、遺構等を含めてとらえると、下欄ようになる。

もう少し詳しく畑間遺跡出土の土器についてみると、下欄①については、第6図に示すように旧海浜に立地していた。②については、古代の土器製塩遺跡のように製塩土器が、捨て場に層をなして堆積するというものではないが、この土器のみが広がっており、異様な状態を示している。③については、土器散布地の砂をふるいにかけて、細片の炭化物を検出した。なお、灰状物質については見出していない。④については、条痕紋土器が混在するものの、その個体数はわずかである。

⑤については、小形平底の形態である。⑥については、内面の下半部に丁寧なヘラ磨きが加えられている。⑦については、関東・東北地方の縄文時代晩期の深鉢形の製塩土器に比べると厚いが、伴出した条痕紋土器と比較すると、薄い作り方である。⑧については、図版5-121・122、図版7-154・155などに示すように、特に胴部、底部において器壁にそって剝離するものが多い。⑨については、顕著ではないが色調の部分的な変化が認められる。⑩については、特に胴部が碎片化している。それに、発掘調査時における本遺物の発見時の所見を加えたい。最終遺構面（地山面）に達したと判断した面から平底の底部がまろぼろと見つかり始め、手で取り上げられる胴部片が細かく割れており、その広がりを確認した時点で、これは製塩土器ではないかとの感想を抱いた。排土をふるいにかけてみると土器の碎片が多く含まれており、それに比べては少量であるが、炭化物も含まれていた。これらの土器の広がりには、ⅢG 1eの戦国期の貝層を伴う土坑の南にある小穴群あたりを境にして、その北東に5mほどの幅をもっており、推定の旧海岸線に平行するような帯状の分布を示している。

なお、本遺跡より100mほど南の2002年度調査地点にも、この土器が分布しており、本遺跡と帯状につな

遺跡・遺物	特徴	畑間遺跡の土器
遺構等の状況	①遺跡立地が海浜（旧海浜）である。	○該当
	②包含層が、異常におびただしい土器片で構成される。完形品がなく碎片化している。	△該当
	③包含層中に炭、灰状物質が混在する。	△該当
	④他の遺物の包含がほとんどない。	△該当
土器の特徴	⑤煮沸容器で、同時期の通有なものとは異なる形態である。	○該当
	⑥無紋で粗雑な土器であるが、内面の調整が丁寧である。	○該当
	⑦他の通常の容器に比べて、薄手である。	△該当
	⑧海水煮沸によってとみられる器壁にそって剝離する破片が多い。ただし、口端に近い部分の破片では少ない。	○該当
	⑨二次的な加熱を受けて、色調が部分的に変化する。	△該当
	⑩碎片化からみて、繰り返しての使用に耐えなかった。あるいは、繰り返して使用しなかった。	△該当

がって広がるものかどうかは不明であるが、広い範囲におよんでいることはまちがいない。

以上のことから、本遺跡から出土した特殊な様相をもつ無紋粗製小形平底深鉢形土器を、製塩土器としてとらえるものである。

製塩土器としての系譜 本遺跡から出土した特殊な様相をもつ無紋粗製小形平底深鉢形土器を製塩土器としてとらえた場合、弥生時代前期後半という時期、中部地方の伊勢湾岸という地域からみて、孤立した土器製塩である。小形平底の深鉢形土器という形態比較からいうと、先行する関東地方の縄文時代の製塩土器の系譜を引くように考えられる。ただ、それらのものよりは、体部の器壁が厚く、胎土に砂を多く含んでおり、様相は異なるものである。

近藤義郎先生は、日本の土器製塩について次のように述べておられる（注2）。

日本の土器製塩には、二つの系譜があった。ひとつは、縄文時代後期安行1式の時期に霞ヶ浦南岸を中心に成立した土器製塩で、やがて東北に及び、松島湾において弥生時代中期に杳として姿を消す系譜である。ここではこれを縄文系譜と呼ぶ。他のひとつは、弥生時代中期に瀬戸内海の児島を中心に誕生した土器製塩で、まもなく瀬戸内を西行あるいは東進し、西は周防・筑紫から天草に及び、東は大阪湾岸を経て南路紀伊から知多・渥美に、北路若狭から能登・越中・越後に達し、また転じて山陰にいたり、のち姿をかえて東北にいたる系譜である。これを弥生系譜と呼びたい。両系譜の時間的接点は弥生時代中期である。

しかしその時期における空間的接点はない。

深鉢形の製塩土器を使用する土器製塩は、宮城県の松島湾周辺地域では弥生時代まで続いており（注3）、そうした点では、決して特異なことではない。松島湾と伊勢湾とでは地域として、相当隔たっているが、本遺跡の様相については、深鉢形の製塩土器を使用する

ことから「縄文系譜」に連なるものとしてとらえたい。とすると、この系譜が中部地方にまで広がることになる。

問題の提起 本遺跡から直線距離にして700mほど南西に烏帽子遺跡が立地する。この遺跡から出土した馬見塚式から檜王式にかけての時期（弥生時代前期前半）の深鉢形土器の一群も、土器自体の特徴から製塩土器としてとらえられるのである。烏帽子遺跡調査報告者の石黒立人氏は、遺物の認定もさることながら、それが使用された製塩炉などの遺構が明らかではないことから、明確に土器製塩が行われたかどうかは、今後の調査の課題としている（注4）。本遺跡においても全くそのとおりである。ただ、限られた範囲ではあるが、本遺跡での製塩土器とした無紋粗製小形平底深鉢形土器の出土状態をみると、砂中に飛び散っており、海岸に近い砂浜でそのまま煮沸を行ったように見受けられ（採鹹作業の有無は不明）、古墳・奈良時代における土器製塩とは規模も含め異なるように思われる。ともあれ、土器の認定からのみではあるが、当地の弥生時代の土器製塩の位置づけの問題を提示しておきたい。

- 1 時期が先行する烏帽子遺跡出土の丸底や尖底の深鉢形土器（注5）と後出の畑間遺跡の小形平底深鉢形土器とが、直結した流れにあるものかどうかは定かにできないが、とにかく、入り江を介して向かい合う場所にあり、全くの無関係であったとは考えにくい。
- 2 烏帽子遺跡出土の丸底や尖底の深鉢形土器に時間的に先行する製塩土器と考えられるものに、詳細が不明ではあるが東海市の菩薩遺跡出土遺物（注6）や豊橋市の大西貝塚の縄文晩期後半（五貫森式期）に属す粗製丸底深鉢形土器がある（注7）。これらとの関係。
- 3 烏帽子遺跡、畑間遺跡では、弥生前期のうちに土器製塩が行われたとして、その後には引き続いておらず。その実態はどのようなものであったのか。

謝 辞

・本報告書を作成するにあたり、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターには大変お世話になりました。とりわけ、同センターの石黒立人、永井宏幸、堀木真美子、松田訓、宮腰健司の各氏には、貴重な時間を割いていただき、諸事ご教示をいただきました。

・2002年11月2日に愛知県埋蔵文化財センターで開催された『考古学フォーラム定例会No49秋』の「弥生時代の製塩土器を考える」において、本遺跡の遺物を紹介し、参会の諸氏にご教示をいただきました。

・縄文時代の製塩土器を実見するため、茨城県土浦市の『上高津貝塚ふるさと歴史の広場』へお伺いし、学芸員の黒澤春彦、関口満の両氏にお世話になりました。

文末になりましたが、厚くお礼申し上げます。

- 注1 近藤義郎研究論文の「師楽式遺跡における塩生産の立証」1958年、「縄文時代における土器製塩の研究」1962年、「知多・渥美地方における製塩土器の研究」1965年、「土器製塩の話」1979・1980年等で、※1984年、青木書店発行の近藤義郎著『土器製塩の研究』に再掲してまとめられている。
- 注2 近藤義郎 1994 「序章—概観と問題—」『日本土器製塩研究』青木書店 3ページ
- 注3 小井川和夫・加藤道男 1994 「宮城県・岩手県」近藤義郎編『日本土器製塩研究』青木書店
- 注4 石黒立人 1996 「付論・烏帽子遺跡をめぐる問題群（補）初期土器製塩の可能性について」『烏帽子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第63集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 86・87ページ
- 注5 注4掲載報告書
- 注6 東海市教育委員会 1987 『菩薩遺跡』
- 注7 岩瀬彰利 1996 「付載1.大西貝塚出土の製塩土器について」『大西貝塚（Ⅱ）』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第29集 豊橋市教育委員会・豊橋遺跡調査会 85～87ページ



第6図 畑間遺跡の立地と周辺の遺跡

付表 無紋粗製小形平底深鉢形土器観察表

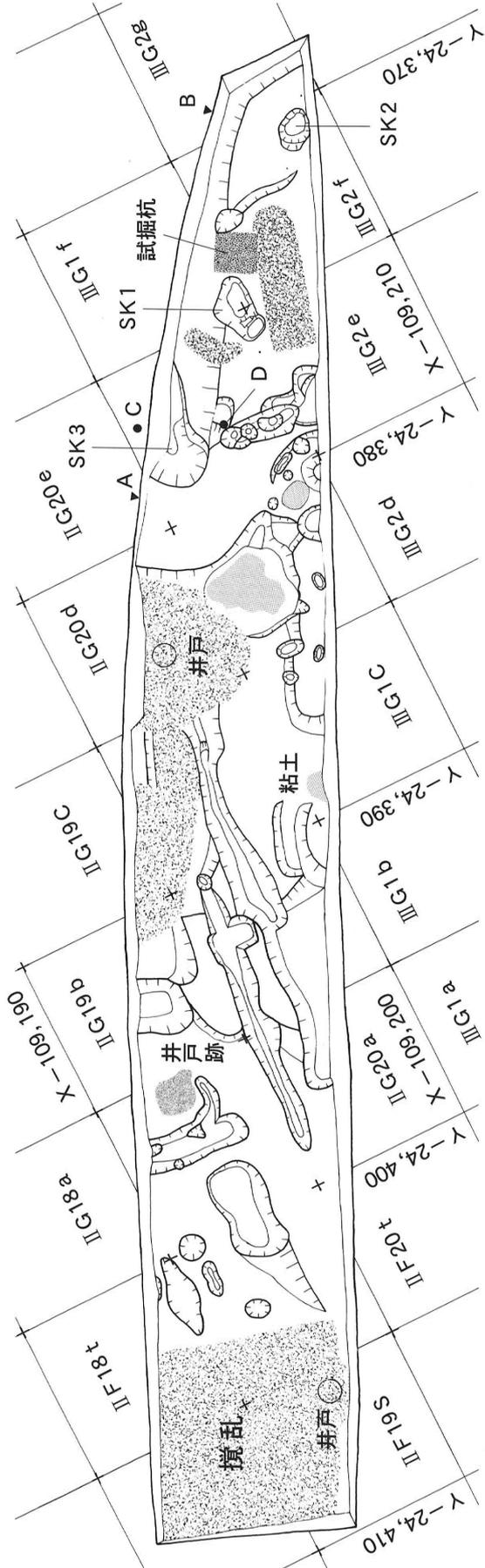
報告書 標記番号	遺物番号	器形	調整		口縁部	色調		底面	底径(cm)	タイプ	出土区	層位等
			外面	内面		外面	内面					
96	1	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は平坦	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
97	60	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は平坦	明褐色	明褐色・黒色・褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
98	58	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は平坦	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
99	54	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は平坦	褐色	灰黄色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
100	57	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は平坦	灰褐色	灰褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
101	7	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は平坦	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
102	56	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は丸みをおひる	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
103	59	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は丸みをおひる	灰褐色	灰色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
104	2	深鉢	口縁部	剥離	口縁は平坦	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
105	55	深鉢	口縁部 (なで)・剥離	へらなで	口縁は丸みをおひる	赤褐色	赤褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
106	53	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は丸みをおひる	灰褐色	明褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
107	105	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は丸みをおひる	明褐色	明褐色				11025ⅢG2e	褐色砂
108	3	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は丸みをおひる	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
109	4	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は丸みをおひる	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
110	8	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は丸みをおひる	灰褐色	灰褐色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
111	5	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は丸みをおひる	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
112	6	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は丸みをおひる	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
113	107	深鉢	口縁部	へらなで	口縁は丸みをおひる	灰褐色	灰褐色				11025ⅢG2e	褐色砂
114	19	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
115	67	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
116	12	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
117	20	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	黒色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
118	44	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	灰褐色	明褐色				11025ⅢG1e	黄灰色砂
119	64	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
120	13	深鉢	胴部	へらなで	内側と外側に剥離	明褐色・褐色	明褐色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
121	18	深鉢	胴部	へらなで	剥離	灰褐色	明褐色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
122	119	深鉢	胴部	へらなで	剥離	明褐色	明褐色				11025ⅢG2e	褐色砂
123	118	深鉢	胴部	へらなで	剥離	明褐色	明褐色				11025ⅢG2e	褐色砂
124	63	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	灰褐色	灰黄色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
125	68	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	灰黄色	灰黄色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
126	80	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	黒褐色	明褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
127	10	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	黒色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
128	42	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	黄灰色砂
129	113	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色・黒色	明褐色・赤褐色				11025ⅢG2e	褐色砂
130	76	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色・灰色	黒色・白色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
131	72	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	黒色	黒色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
132	43	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	黄灰色砂
133	77	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	赤褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
134	112	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	灰褐色	灰褐色				11025ⅢG2e	褐色砂
135	17	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	赤褐色	赤褐色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
136	117	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	黒色				11025ⅢG2f	褐色砂
137	74	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	灰褐色	灰褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
138	66	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	褐色	明褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
139	78	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
140	65	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	黒色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
141	75	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	灰褐色	明褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
142	70	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
143	127	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	混貝暗褐色砂
144	21	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	黒色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂
145	73	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色・褐色	明褐色・灰色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
146	114	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	褐色	赤褐色				11025ⅢG2e	褐色砂
147	71	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色・褐色	明褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
148	79	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
149	69	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	黒色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
150	14	深鉢	胴部	へらなで	へらなで	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	土器内・褐色砂

報告書 掲載番号	遺物番号	器形	部位	調整		口縁部	色調		底面	底径(cm)	タイプ	出土区	階位等
				外面	内面		外面	内面					
151	11	深鉢	胴部	へらけずり	へらみかき	明褐色	明褐色	平滑	2.8	B	11025ⅢG1e	土室内・褐色砂	
152	86	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	赤褐色	平滑	33	B	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	
153	143	深鉢	底部	なで	(なで)	明褐色	明褐色	砂粒痕	27	A	11025ⅢG1e	東端ヘルト・混貝暗褐色砂	
154	23	深鉢	底部	なで・へら削り	へらみかき	明褐色	明褐色	平滑	27	A	11025ⅢG1e	土室内・褐色砂	
155	47	深鉢	底部	へら削り	剥離	明褐色	明褐色	平滑	27	A	11025ⅢG1e	黄灰色砂	
156	84	深鉢	底部	なで・へら削り	剥離	赤褐色	赤褐色	砂粒	29	A	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	
157	85	深鉢	底部	なで	剥離	赤褐色	赤褐色	線痕	29	A	11025ⅢG1e	混貝暗褐色砂	
158	144	深鉢	底部	なで・削り	剥離	明褐色	明褐色	砂粒痕	3	A	11025ⅢG1e	土室内・褐色砂	
159	25	深鉢	底部	へら削り	剥離	明褐色	明褐色	平滑・小窪	3.4	B	11025ⅢG1e	土室内・褐色砂	
160	32	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	明褐色	砂粒痕	32	A	11025ⅢG1e	土室内・褐色砂	
161	29	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	明褐色	植物繊維痕	3.3	A	11025ⅢG1e	土室内・褐色砂	
162	26	深鉢	底部	へら削り	へらみかき	明褐色	明褐色	平滑	3.3	A	11025ⅢG1e	褐色砂(地山直上)	
163	102	深鉢	底部	なで・へら削り	へらみかき	明褐色	明褐色	平滑	3.4	A	11025ⅢG2e	褐色砂(地山直上)	
164	120	深鉢	底部	なで	剥離	灰色・黒色	灰色・黒色	砂粒痕・黒色	3.4	A	11025ⅢG・ⅢG	排土	
165	158	深鉢	底部	なで・樽痕(横方向)	剥離	明褐色	明褐色	線痕	38	A	11025ⅢG1e	南端・褐色砂	
166	147	深鉢	底部	へら削り・なで	へらみかき	明褐色	明褐色	平滑	3.7	B	11025ⅢG1e	土室内・褐色砂	
167	28	深鉢	底部	へら削り	へらみかき	明褐色	明褐色	平滑	3.7	B	11025ⅢG2e	褐色砂	
168	124	深鉢	底部	へら削り・なで	剥離	明褐色・赤褐色・灰褐色	明褐色	平滑	3.7	A	11025ⅢG2e	褐色砂	
169	157	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色・灰色・黒色	褐色	平滑・植物繊維痕	4	B	11025ⅢG19a	井戸跡(排物溜)	
170	92	深鉢	底部	なで・へら削り	へらみかき	明褐色	明褐色	平滑	3.9	A	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	
171	142	深鉢	底部	なで	へらみかき	灰褐色	黒色	砂・線痕	3.9	A	11025ⅢG1e	混貝暗褐色砂	
172	150	深鉢	底部	へら削り	剥離	赤褐色	赤褐色	平滑	4.3	B	11025ⅢG20c	褐色砂	
173	103	深鉢	底部	へら削り・なで	へらみかき	灰褐色	明褐色・黒色	砂粒・小窪痕	4	A	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	
174	131	深鉢	底部	なで	剥離	灰褐色	黒色	砂・線痕	4	A	11025ⅢG2e	控乱	
175	140	深鉢	底部	削り	剥離	灰褐色	灰褐色	砂・線痕	4	A	11025ⅢG1e	純貝層	
176	122	深鉢	底部	なで	剥離	灰褐色	灰褐色	平滑・小窪	4.1	A	11025ⅢG2e	褐色砂	
177	87	深鉢	底部	なで	剥離	灰褐色	灰褐色	平滑	4.3	B	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	
178	97	深鉢	底部	なで・へら削り	剥離	明褐色	明褐色	平滑	4.2	A	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	
179	126	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	明褐色	平滑・植物繊維痕	5	A	11025ⅢG2e	褐色砂	
180	36	深鉢	底部	なで	へらみかき	灰褐色	黄白色	砂・線痕	3.8	B	11025ⅢG1e	灰褐色砂	
181	34	深鉢	底部	なで	へらみかき	明褐色	明褐色	平滑	4	Y	11025ⅢG1e	土室内・褐色砂	
182	139	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	黒色	平滑	5.2	Y	11025ⅢG2f	褐色砂	
183	49	深鉢	底部	なで	剥離	灰褐色	黒色	平滑・線	4	Y	11025ⅢG1e	褐色砂	
184	90	深鉢	底部	なで	剥離	灰褐色	灰褐色	平滑・線	4	Y	11025ⅢG1e	黄灰色砂	
185	96	深鉢	底部	なで	剥離	灰褐色	黒色	平滑	3.3	X	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	
186	100	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	明褐色	平滑	4.2	Y	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	
187	88	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	明褐色	砂粒痕	4.4	Y	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	
188	145	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	黒色	平滑	4	Y	11025ⅢG1e	混貝暗褐色砂	
189	91	深鉢	底部	なで	剥離	灰褐色	黒色	線	3.4	X	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	
190	121	深鉢	底部	なで・指おさえ	剥離	褐色	褐色	平滑	3.5	X	11025ⅢG2e	褐色砂	
191	98	深鉢	底部	なで	剥離	灰褐色	灰褐色	砂粒・植物繊維痕	4	X	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	
192	125	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	黒色	平滑	3.9	Y	11025ⅢG2e	褐色砂	
193	30	深鉢	底部	なで	剥離	灰褐色・橙色	明褐色	植物繊維痕	4.1	Y	11025ⅢG1e	土室内・褐色砂	
194	24	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	明褐色	砂粒痕	4.3	Y	11025ⅢG1e	土室内・褐色砂	
195	151	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	灰色	砂粒痕	4.7	Y	11025ⅢG19a	暗褐色砂	
196	37	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	黒色	平滑	3.8	Y	11025ⅢG1e	灰褐色砂	
197	89	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	明褐色	線・砂粒	3.9	X	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	
198	31	深鉢	底部	なで・へら削り	剥離	灰褐色	明褐色	平滑	4.1	Y	11025ⅢG1e	土室内・褐色砂	
199	104	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	明褐色	砂粒・小窪痕	4.3	Y	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	
200	82	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	明褐色	平滑	3.8	X	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	
201	35	深鉢	底部	なで	剥離	部分的に赤	明褐色	小窪・植物繊維痕	4.6	X	11025ⅢG1e	土室内・褐色砂	
202	52	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色・橙色	明褐色	平滑	3.9	Y	11025ⅢG1e	土室内・褐色砂	
203	94	深鉢	底部	なで	剥離	灰白色	灰白色	平滑	4	X	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	
204	130	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色・黒色	明褐色	線痕	4.2	X	11025ⅢG1e	純貝層	
205	159	深鉢	底部	へら削り	剥離	明褐色	明褐色	小窪・植物繊維痕	4	Y	11025ⅢG・ⅢG	排土	
206	99	深鉢	底部	なで	剥離	明褐色	明褐色	植物繊維痕	4.4	Y	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)	

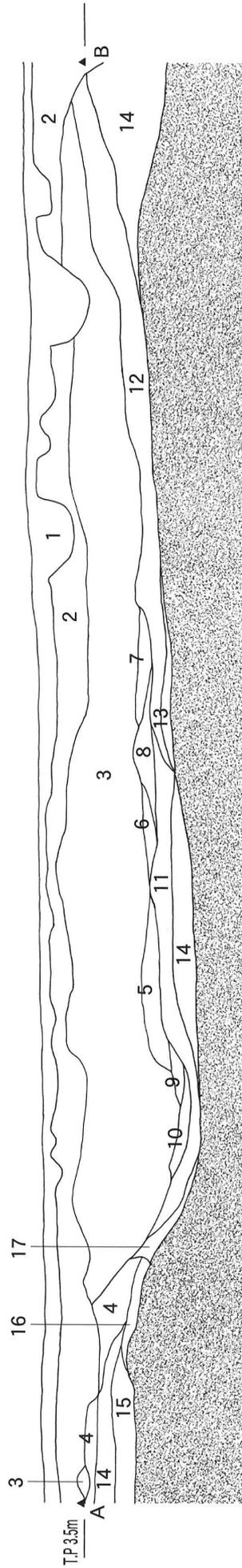
報告書 掲載番号	器物番号	器形	部位	調整		口縁部	色調		底面	口径(cm)	タイプ	出土区	層位等
				外面	内面		外面	内面					
207	155	深鉢	底部	なで	へらみがき		明褐色	明褐色	平滑	4.4	Y	11025ⅡG19a	焼物層
208	156	深鉢	底部	なで	へらみがき		灰黄色	灰黄色	平滑	4.2	X	11025ⅡG19a	井戸跡(焼物層)
209	83	深鉢	底部	なで・へら削り	へらみがき		明褐色	赤褐色	平滑	4.3	X	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
210	136	深鉢	底部	なで・指先	へらみがき		明褐色・赤褐色・黒色	明褐色	砂・礫痕	4.4	X	11025ⅢG2f	純貝層
211	33	深鉢	底部	なで	剥離		明褐色	明褐色	平滑・小礫	4	Y	11025ⅢG1e	土壌内・褐色砂
212	48	深鉢	底部	なで・指頭	へらみがき		明褐色	明褐色	平滑・礫	4.2	Y	11025ⅢG1e	黄灰色砂
213	93	深鉢	底部	なで	へらみがき		明褐色	明褐色	砂粒痕	4.4	Y	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
214	101	深鉢	底部	なで	へらみがき		明褐色	明褐色	砂粒	4.9	Y	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
215	138	深鉢	底部	なで	剥離		明褐色・黒色	明褐色	礫痕	4.4	Y	11025ⅢG2f	暗褐色砂
216	135	深鉢	底部	なで	剥離		明褐色	明褐色	砂粒痕	4.5	Y	11025ⅢG2f	純貝層
217	95	深鉢	底部	なで・指頭	へらみがき		明褐色	明褐色	平滑・種物線痕	5	Y	11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
218	27	深鉢	底部	へら削り	へらみがき	丸底構になる	明褐色	明褐色	平滑		(丸底)	11025ⅢG1e	土壌内・褐色砂
219	38	深鉢	底部	なで・へら削り	剥離	口端は平坦	明褐色・灰色	明褐色	(削り)		(丸底)	11025ⅢG1e	土壌内・褐色砂
	15	深鉢	胴部	なで	へらみがき	口端は平坦	明褐色・灰色	明褐色				11025ⅢG1e	土壌内・褐色砂
	16	深鉢	胴部	なで	へらみがき	内側と外側に剥離	明褐色・灰色	明褐色				11025ⅢG1e	土壌内・褐色砂
	22	深鉢	胴部	削り	なで		灰白色	灰白色				11025ⅢG1e	土壌内・褐色砂
	39	深鉢	底部	なで	剥離		明褐色・灰色	明褐色	砂粒痕		A	11025ⅢG1e	土壌内・褐色砂
	40	深鉢	底部	なで	へらみがき		明褐色	黒色	砂・礫痕		X	11025ⅢG1e	灰褐色砂
	41	深鉢	底部	なで	へらみがき		灰褐色・灰色	灰褐色・灰色				11025ⅢG1e	灰褐色砂
	45	深鉢	胴部	なで	へらみがき		灰褐色	黒色				11025ⅢG1e	黄灰色砂
	46	深鉢	胴部	なで	へらみがき		灰褐色・灰色	灰褐色・黒色				11025ⅢG1e	黄灰色砂
	50	深鉢	口縁部	なで	へらみがき	器表面磨耗、口端平坦	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	土壌周辺・褐色砂
	51	深鉢	口縁部	なで	へらみがき	器表面磨耗、口端平坦	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	褐色砂(地山直上)
	61	深鉢	胴部	なで・(剥離)	へらみがき		明褐色	明褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
	62	深鉢	胴部	なで	へらみがき		明褐色	明褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
	81	深鉢	胴部	なで	へらみがき		明褐色	明褐色				11025ⅢG1e・2e	褐色砂(地山直上)
	106	深鉢	口縁部	なで	へらみがき	口端は平坦	明褐色	明褐色				11025ⅢG2e	褐色砂
	108	深鉢	胴部	なで	へらみがき		暗赤褐色	赤褐色				11025ⅢG2e	褐色砂
	109	深鉢	胴部	なで	へらみがき		灰褐色	赤褐色				11025ⅢG2e	褐色砂
	110	深鉢	胴部	へらけずり	へらみがき		明褐色・白色	明褐色・灰色				11025ⅢG2e	褐色砂
	111	深鉢	胴部	へらけずり	へらみがき		黒色・褐色	赤褐色				11025ⅢG2e	褐色砂
	115	深鉢	胴部	へらけずり	へらなか		明褐色	明褐色				11025ⅢG2e	褐色砂
	116	深鉢	胴部	へらけずり	へらみがき		明褐色	明褐色				11025ⅢG2e	褐色砂
	123	深鉢	底部	なで	へらみがき	口端は丸みを帯びる	明褐色・淡灰褐色	明褐色	砂粒・小礫痕		Y	11025ⅢG2e	褐色砂
	128	深鉢	口縁部	なで・輪積み痕	なで	口端は丸みを帯びる	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	純貝層
	129	深鉢	口縁部	なで・輪積み痕	なで	口端は丸みを帯びる	明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	純貝層
	132	深鉢	胴部	なで・輪積み痕	なで		明褐色	明褐色				11025ⅢG2f	純貝層
	133	深鉢	胴部	なで・ひび割れ	へらみがき		明褐色	明褐色				11025ⅢG2f	純貝層
	137	深鉢	底部	削り	へらみがき		明褐色	明褐色				11025ⅢG2f	純貝層
	141	深鉢	底部	削り	へらみがき		明褐色	明褐色				11025ⅢG1e	混貝暗褐色砂
	146	深鉢	胴部	剥離	へらみがき		明褐色	明褐色	平滑		Y	11025ⅢG1e	純貝層
	148	深鉢	底部	なで	剥離		明褐色	明褐色	平滑		A	11025ⅢG1a	黄褐色砂
	149	深鉢	底部	なで	剥離		明褐色	明褐色	平滑		A	11025ⅡG20c	混貝暗褐色砂
	152	深鉢	胴部	へら削り	へらみがき		明褐色	明褐色	砂・礫痕		A	11025ⅡG19a	暗褐色砂
	153	深鉢	底部	へら削り	剥離		明褐色	明褐色	平滑		A	11025ⅡG19a	暗褐色砂
	154	深鉢	底部	なで・削り	へらみがき		明褐色・赤褐色	明褐色	礫痕		A	11025ⅡG19a	混貝暗褐色砂

★タイプ区分 A=底面がはみ出さない B=底面がわずかにはみ出す X=底面がはみ出して上に折れ曲がる Y=底面が円盤状にのみみ出す

図版1 遺構等配置図、貝層断面図



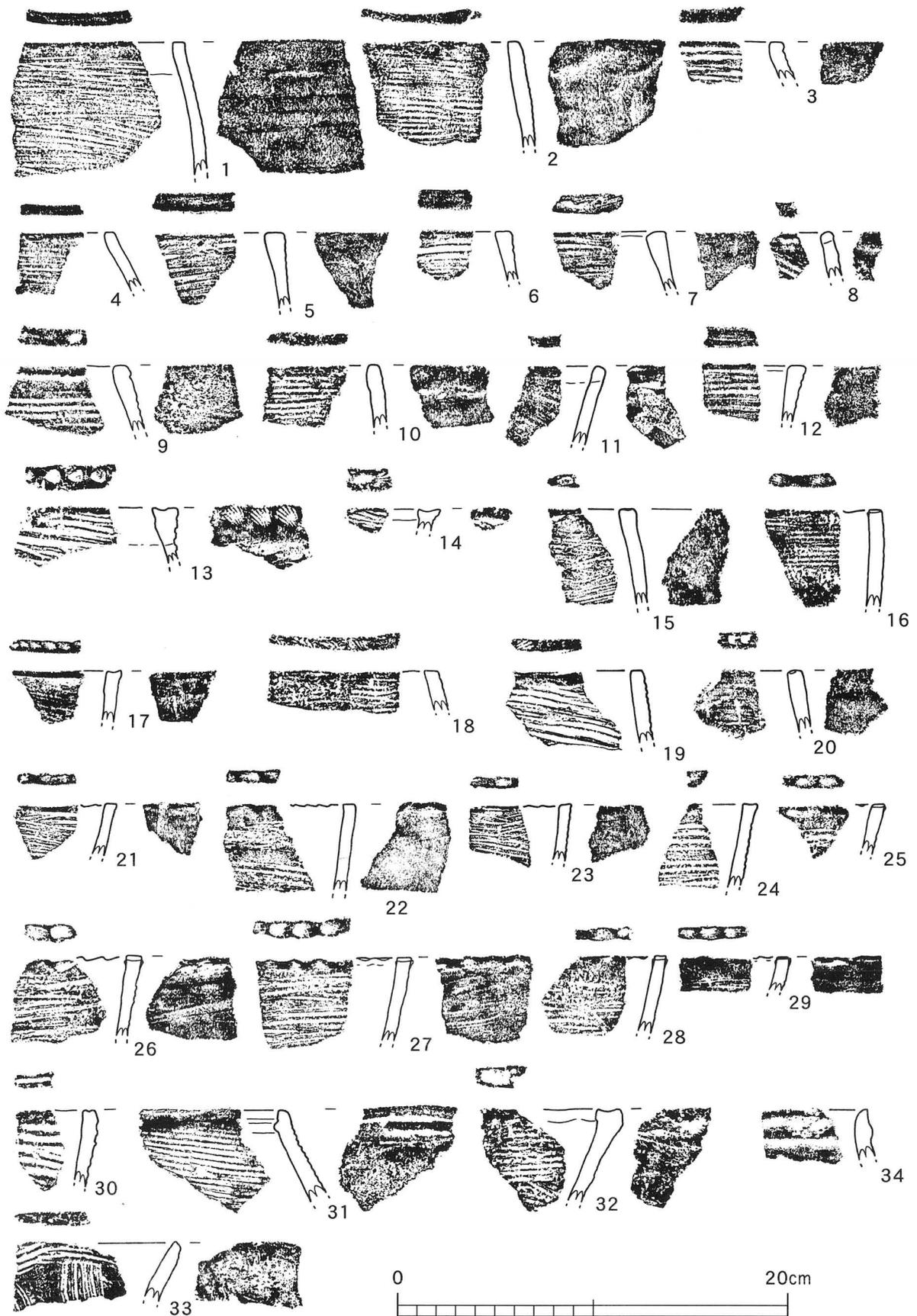
遺構等配置図 (1/200)



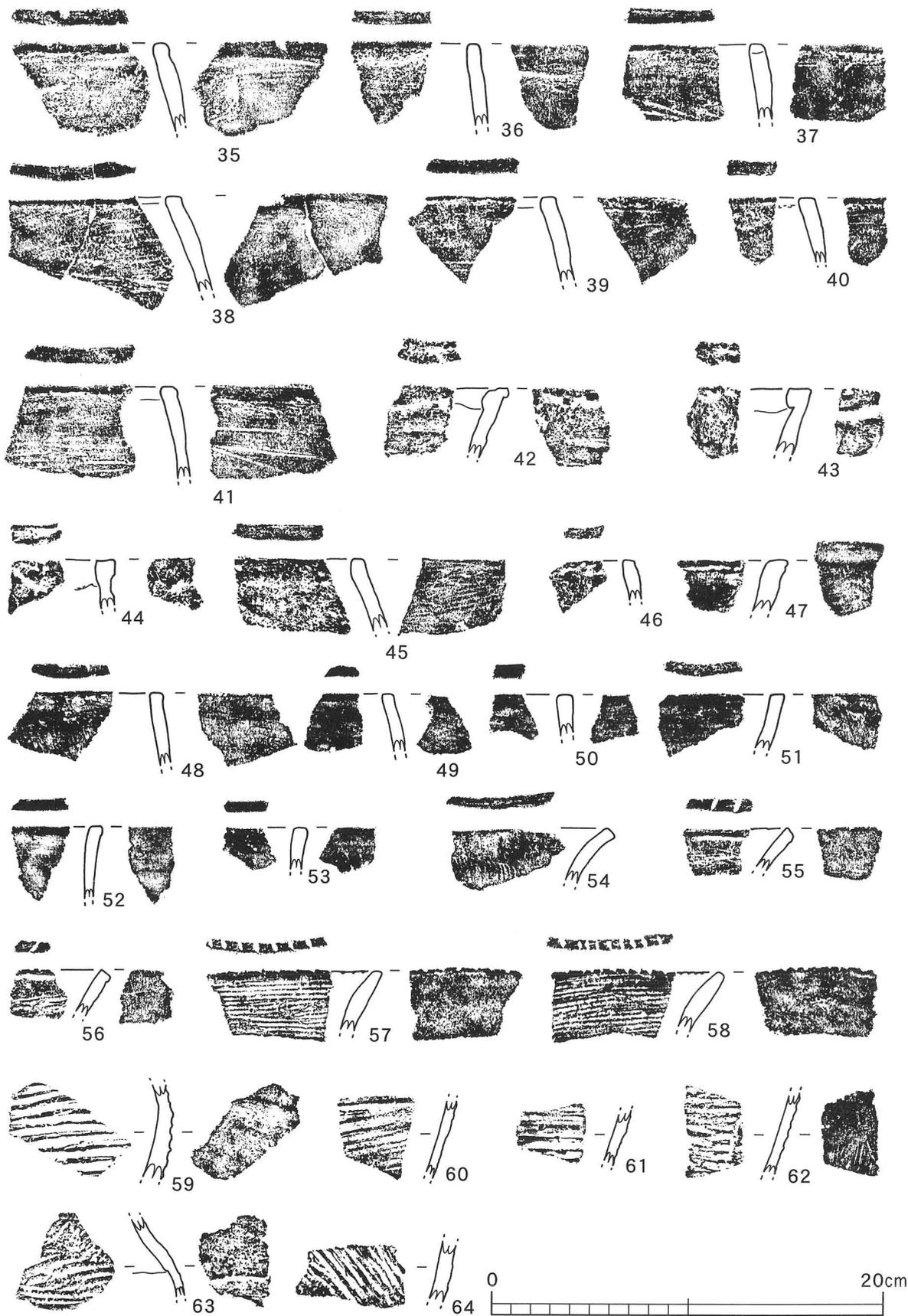
貝層断面図 (1/50)

- 1 表土 2 混貝暗褐色砂 (貝少ない) 3 純貝層 4 混貝暗褐色砂 (貝少ない) 5 オリーブ色粗砂
 6 黄褐色粗砂 7 黒褐色粗砂 8 褐色砂礫 9 暗オリーブ色粗砂 10 混貝黒色砂
 11 黄褐色砂礫 12 混貝黒褐色砂 13 灰褐色砂 14 黒色砂 15 暗オリーブ色砂 (黒味強い)
 16 暗オリーブ色砂 17 オリーブ色砂

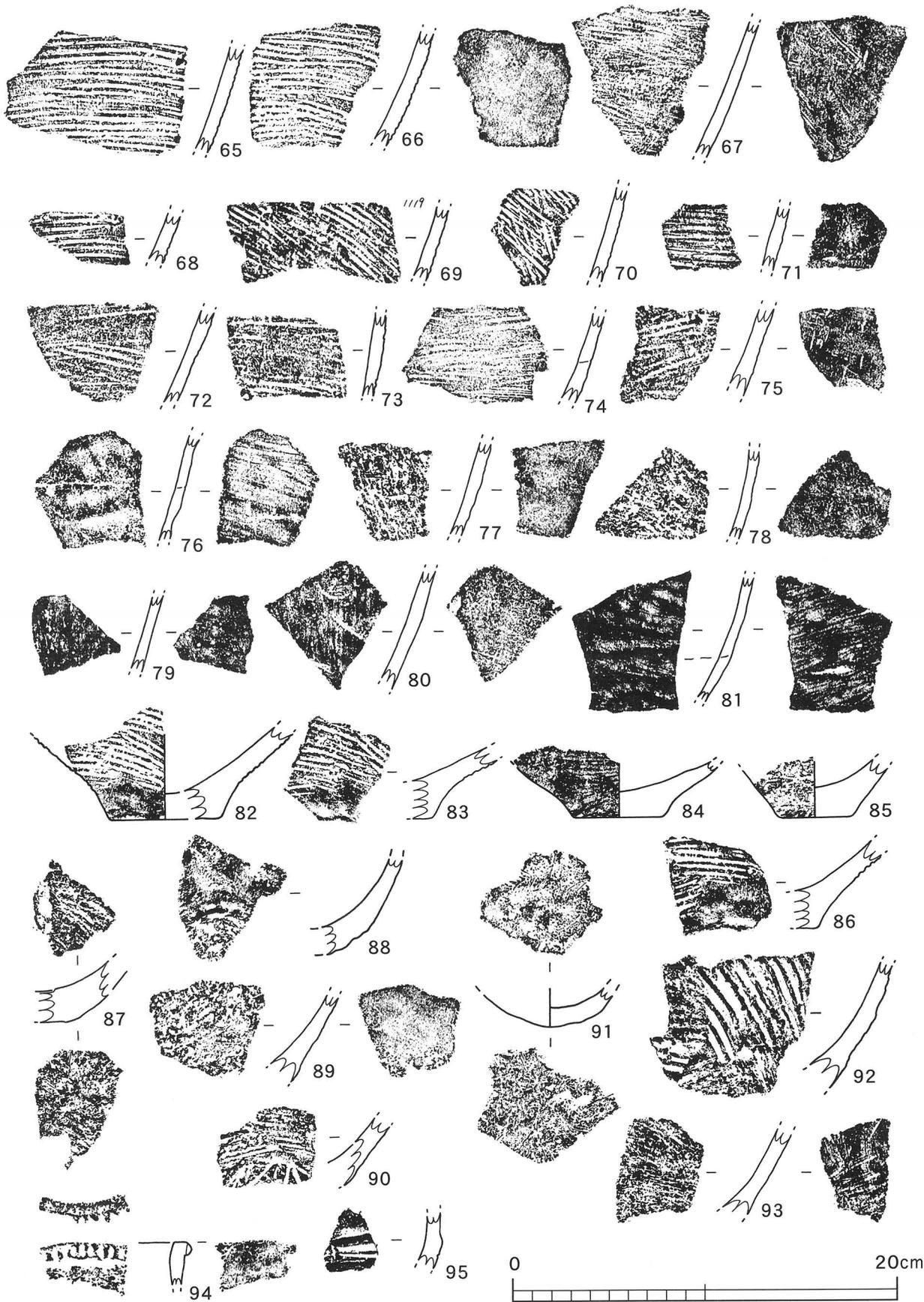
图版 2 条痕纹系土器 拓影图



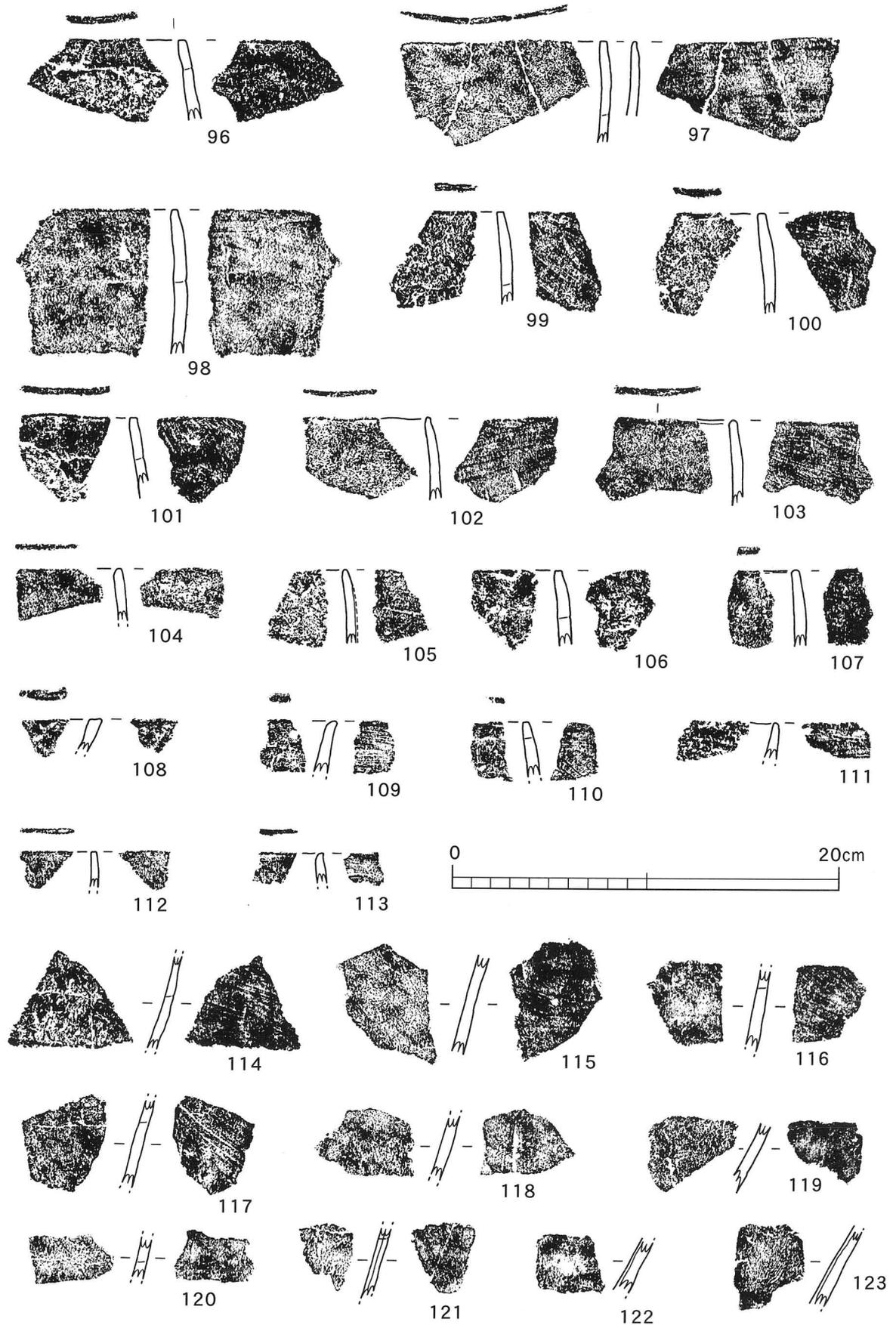
图版3 条痕纹系土器等 拓影图



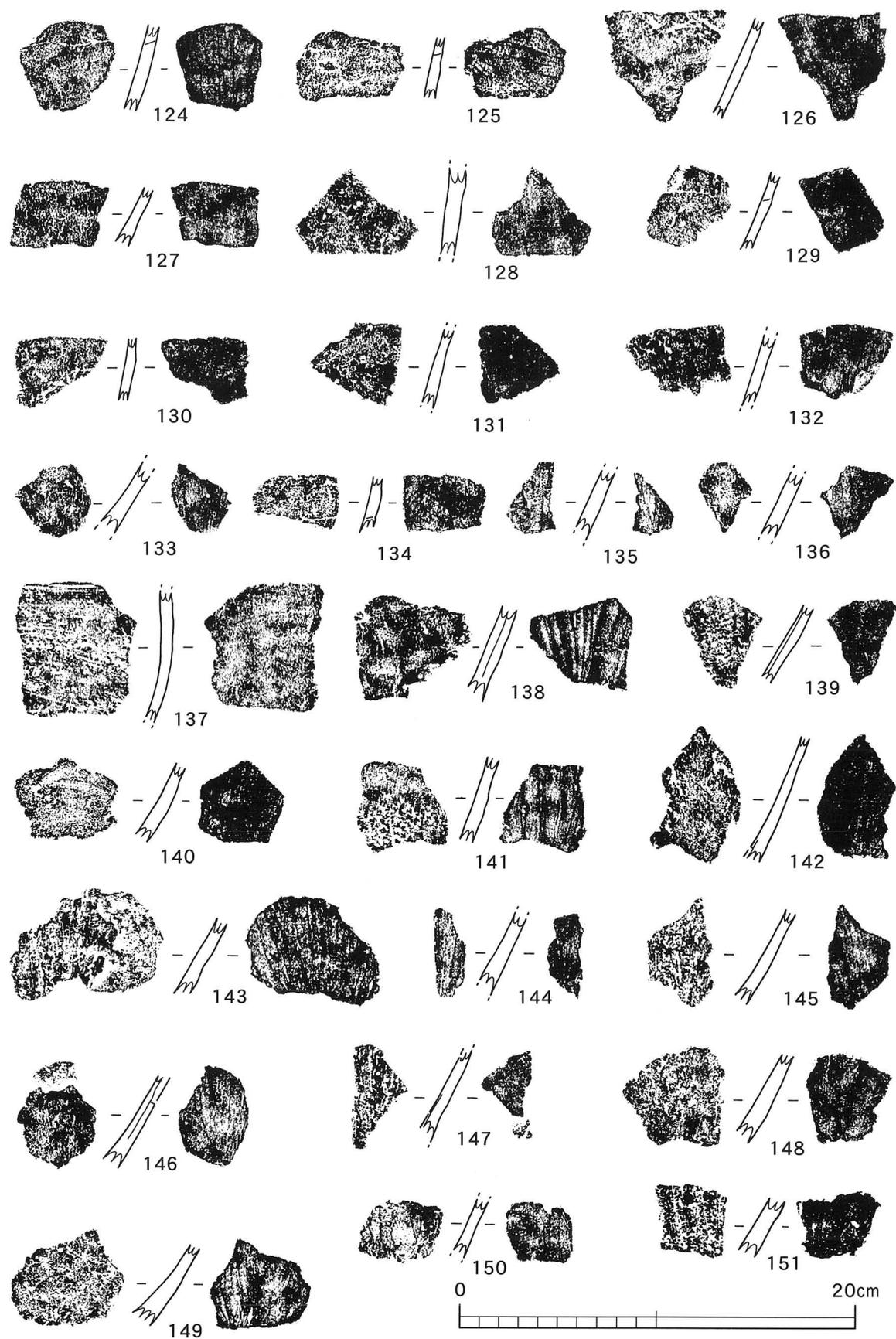
图版 4 条痕纹系土器等 拓影图



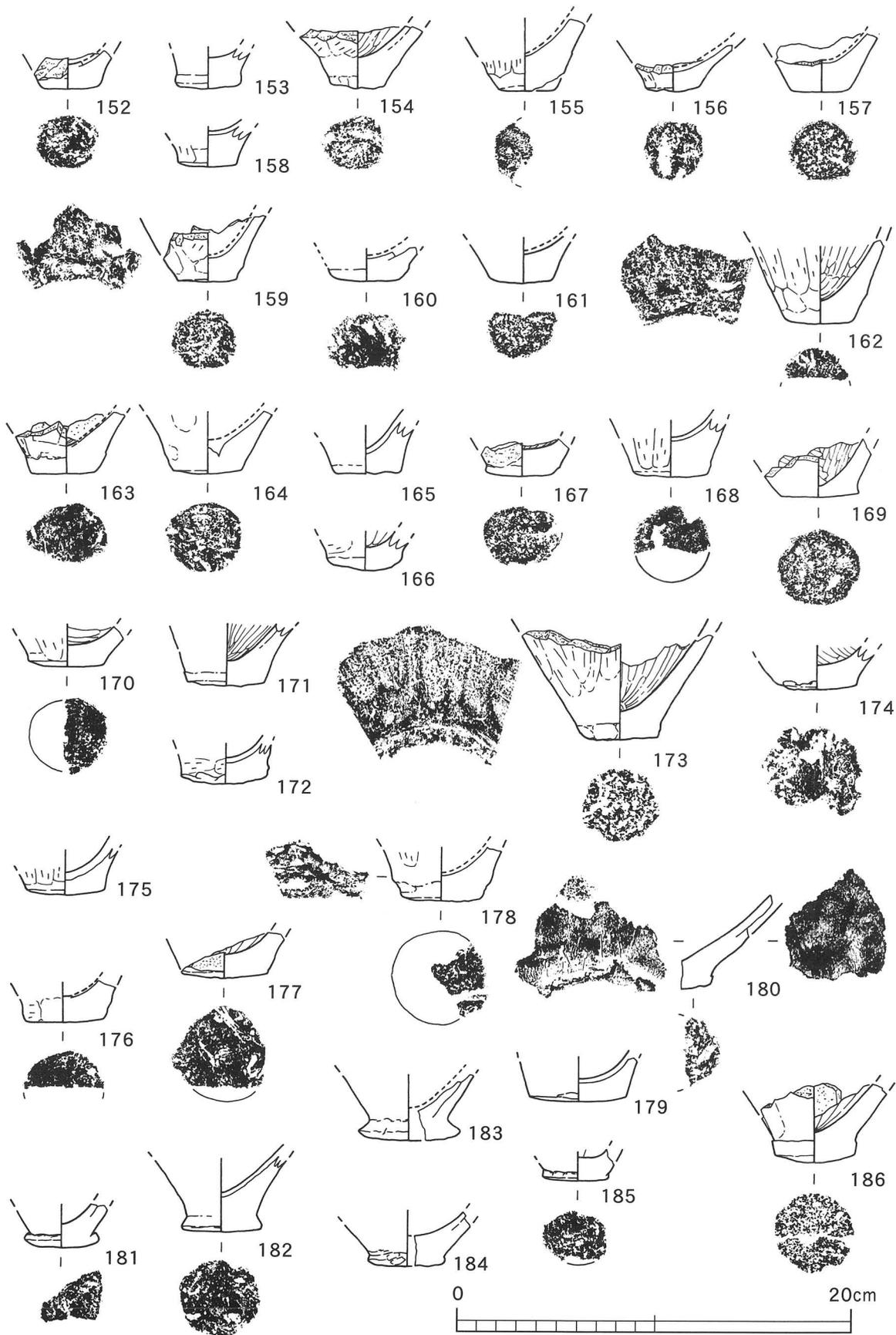
図版5 無紋粗製小型平底深鉢形土器 拓影図



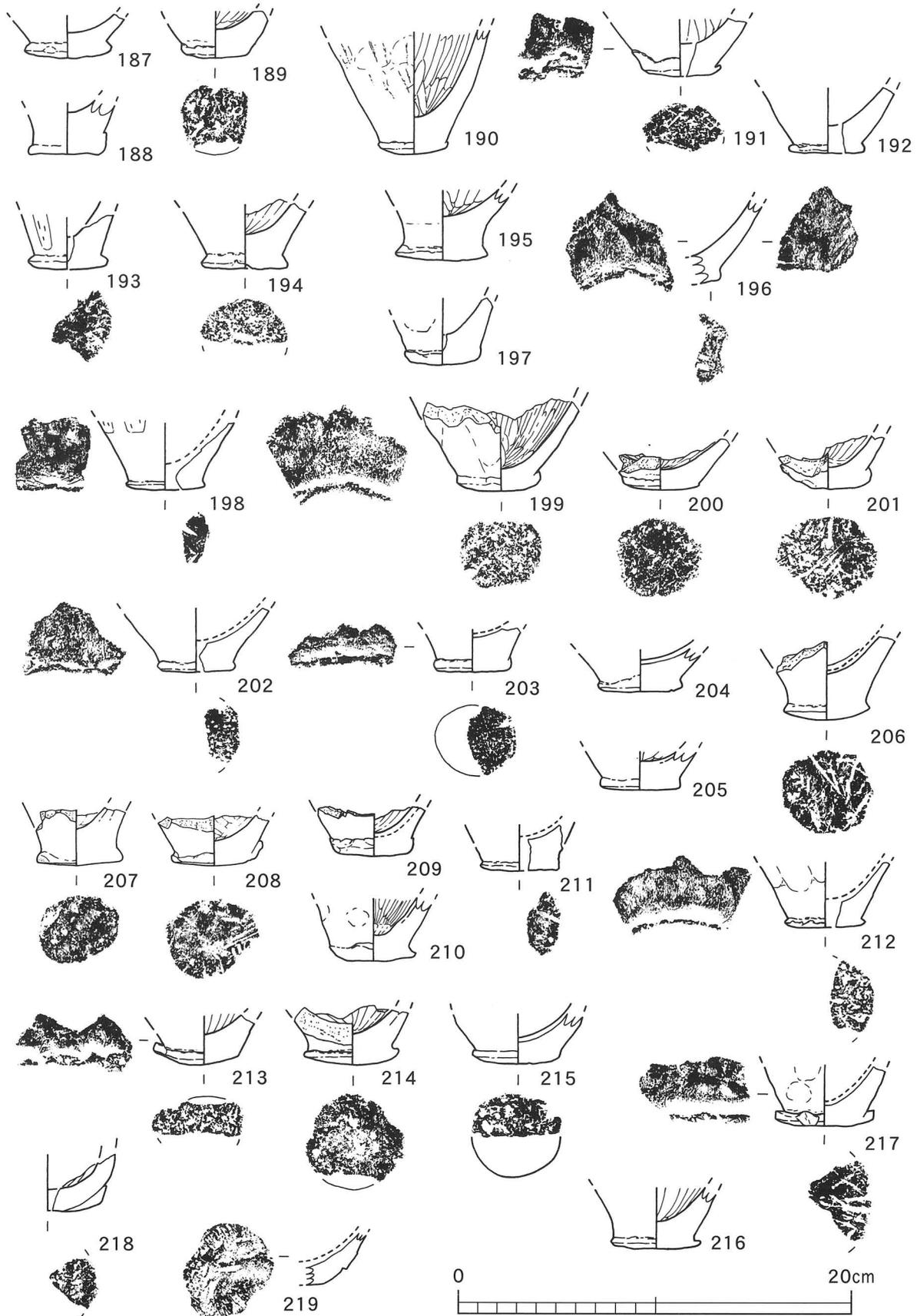
図版6 無紋粗製小型平底深鉢形土器 拓影図



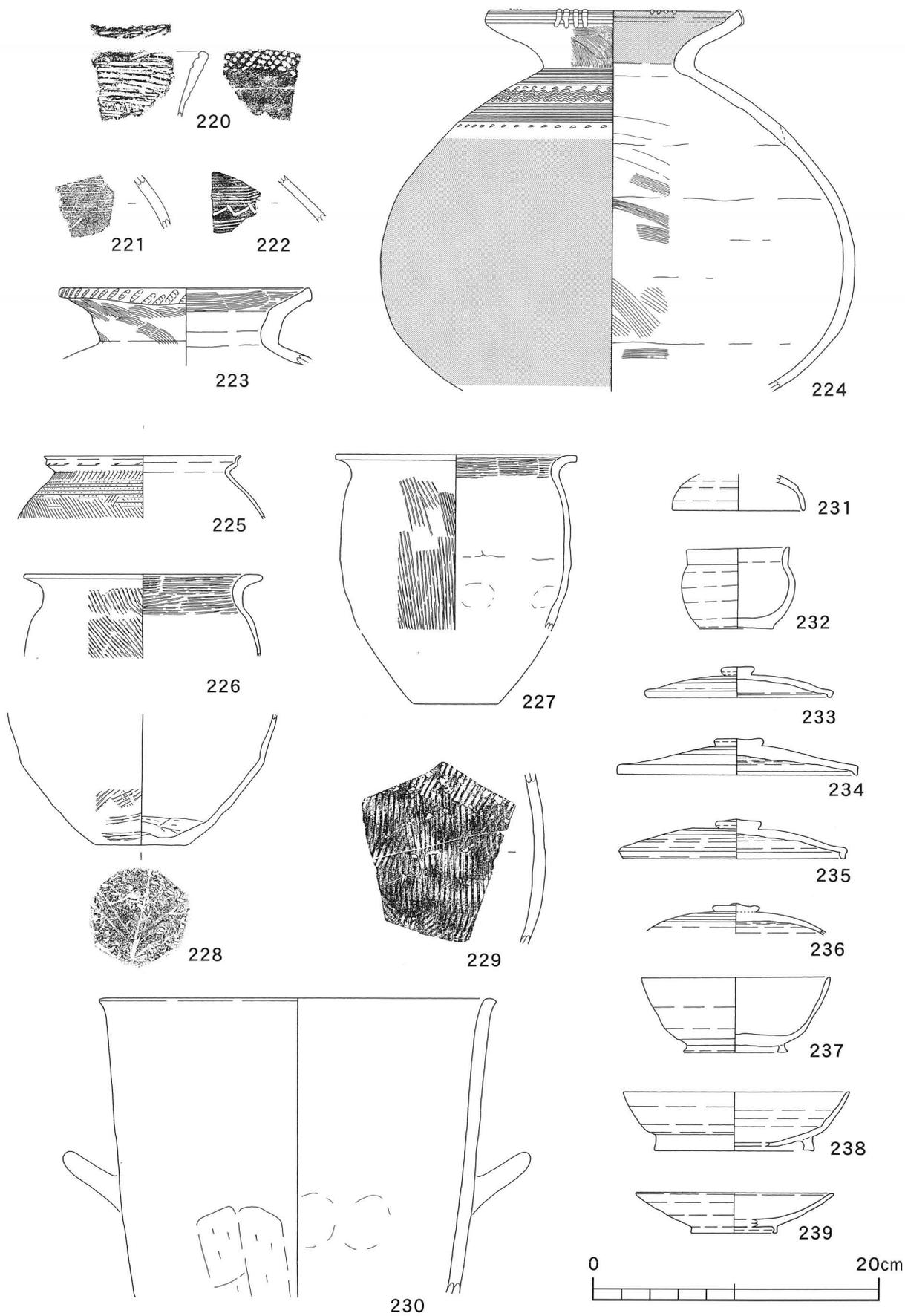
図版7 無紋粗製小型平底深鉢形土器底部 実測・拓影図



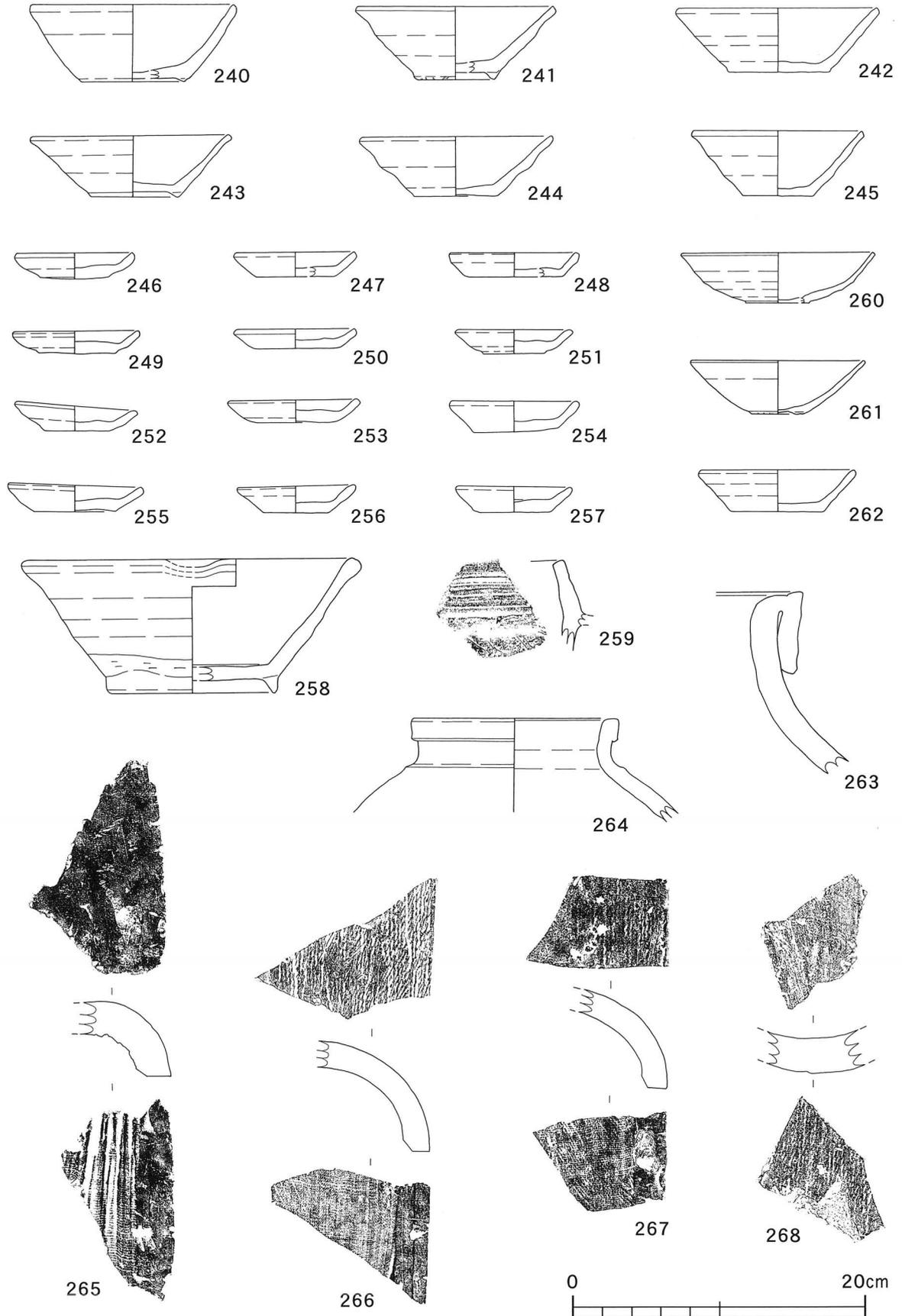
図版8 無紋粗製小型平底深鉢形土器底部 実測・拓影図



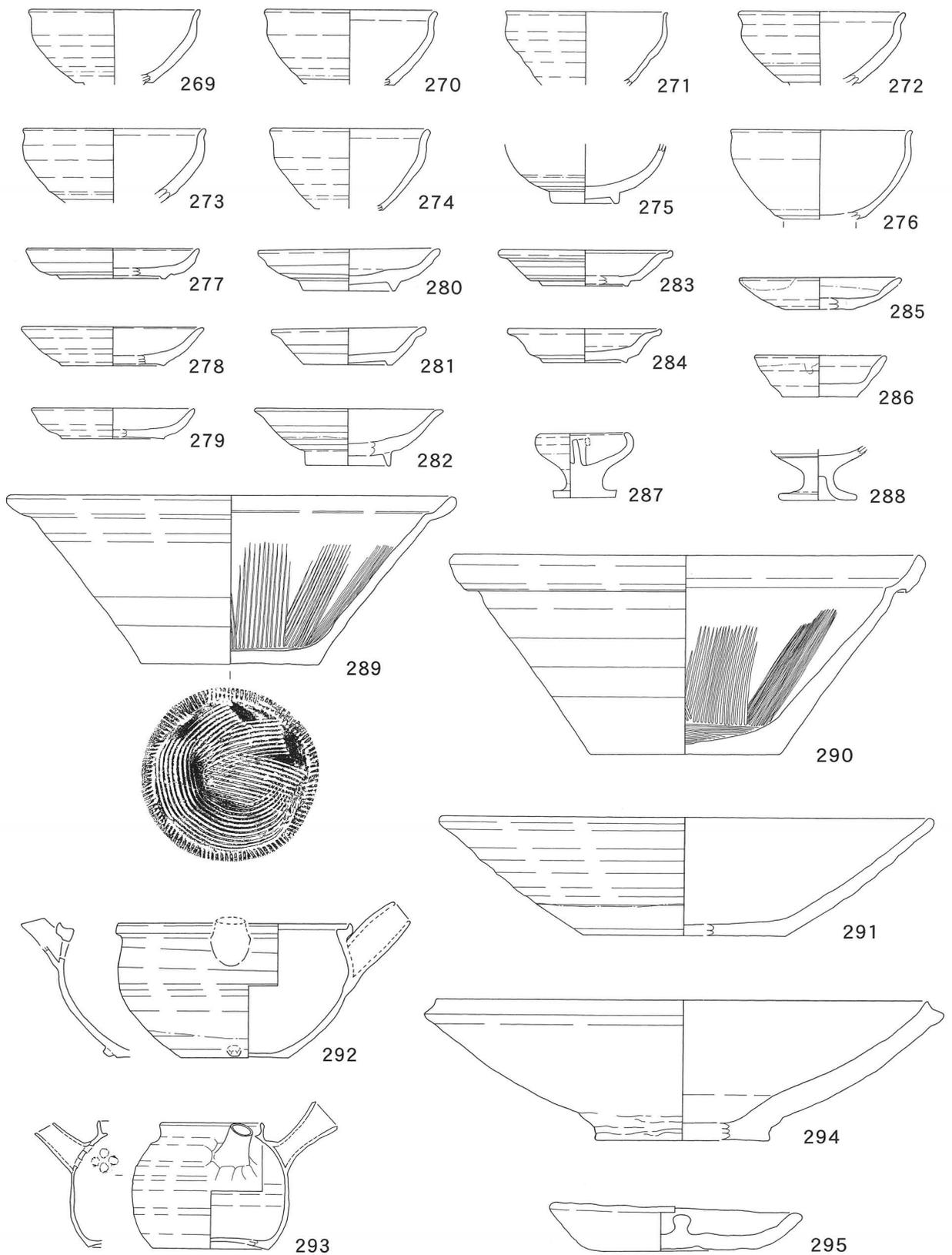
図版 9 弥生時代～古代の土器 実測・拓影図



図版10 中世の土器 実測・拓影図

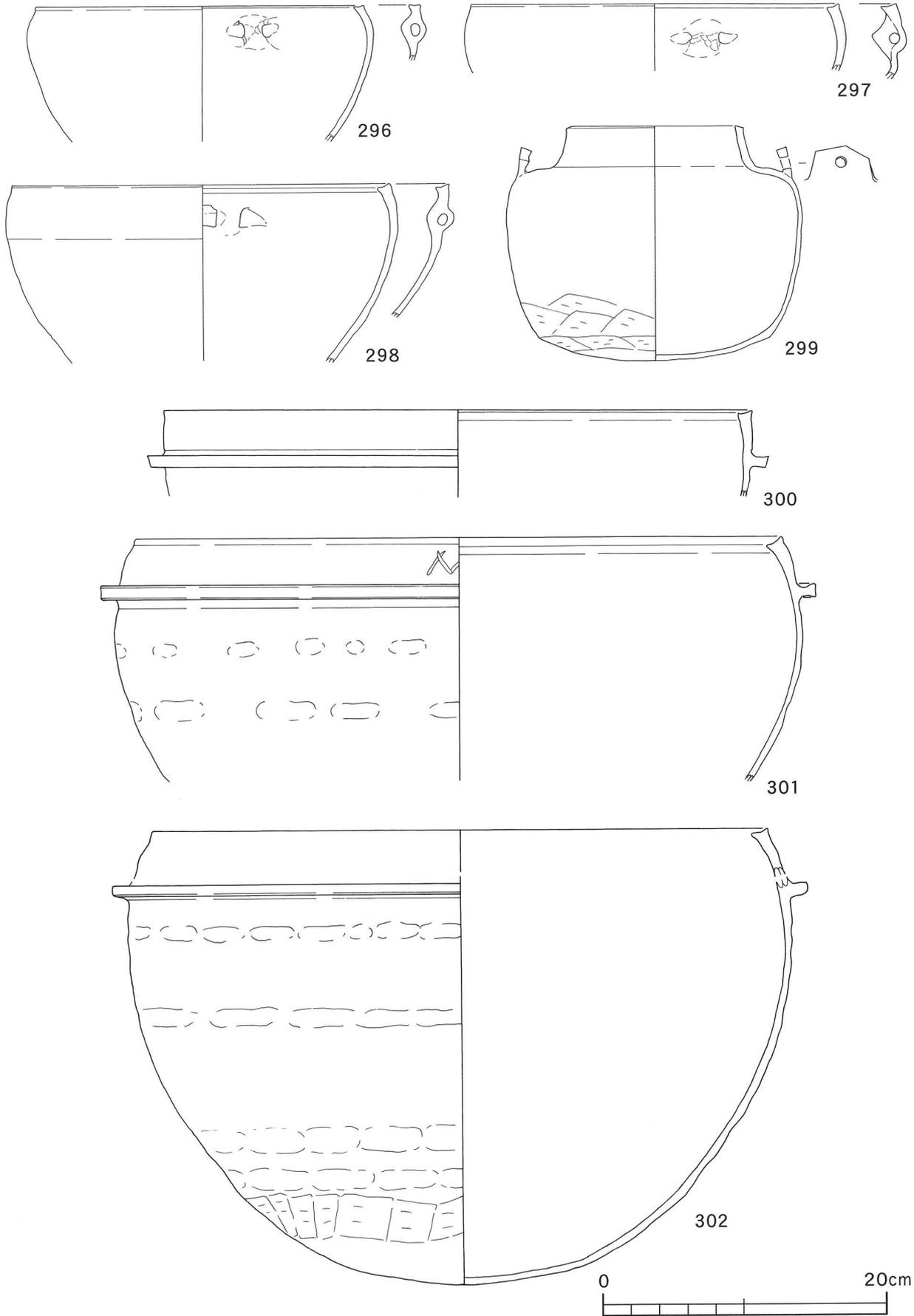


図版11 戦国期～近世の陶器類 実測・拓影図

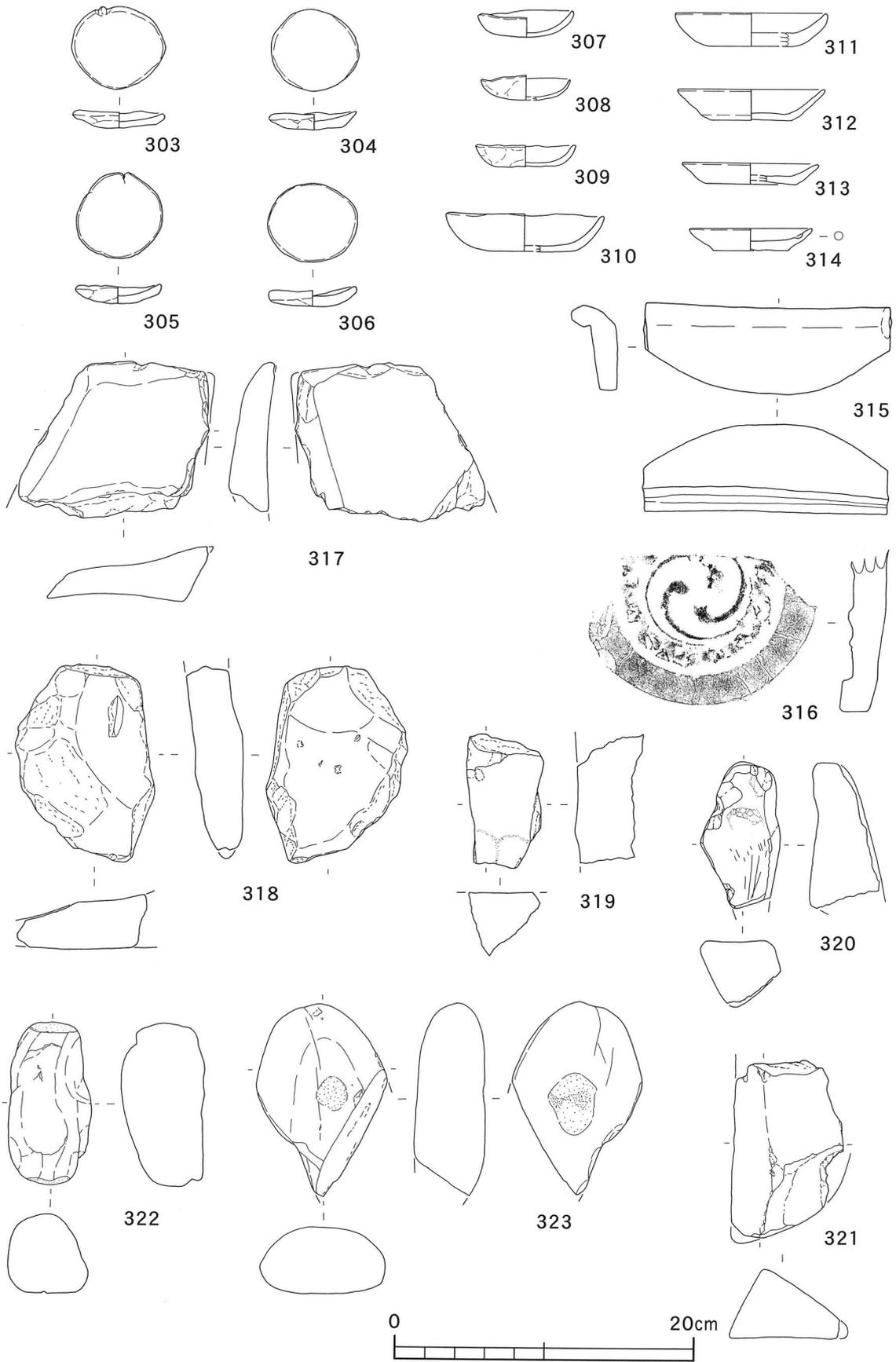


0 20cm

図版12 戦国期～近世の土師質土器 実測図



図版13 土師皿・瓦・石製品 実測・拓影図



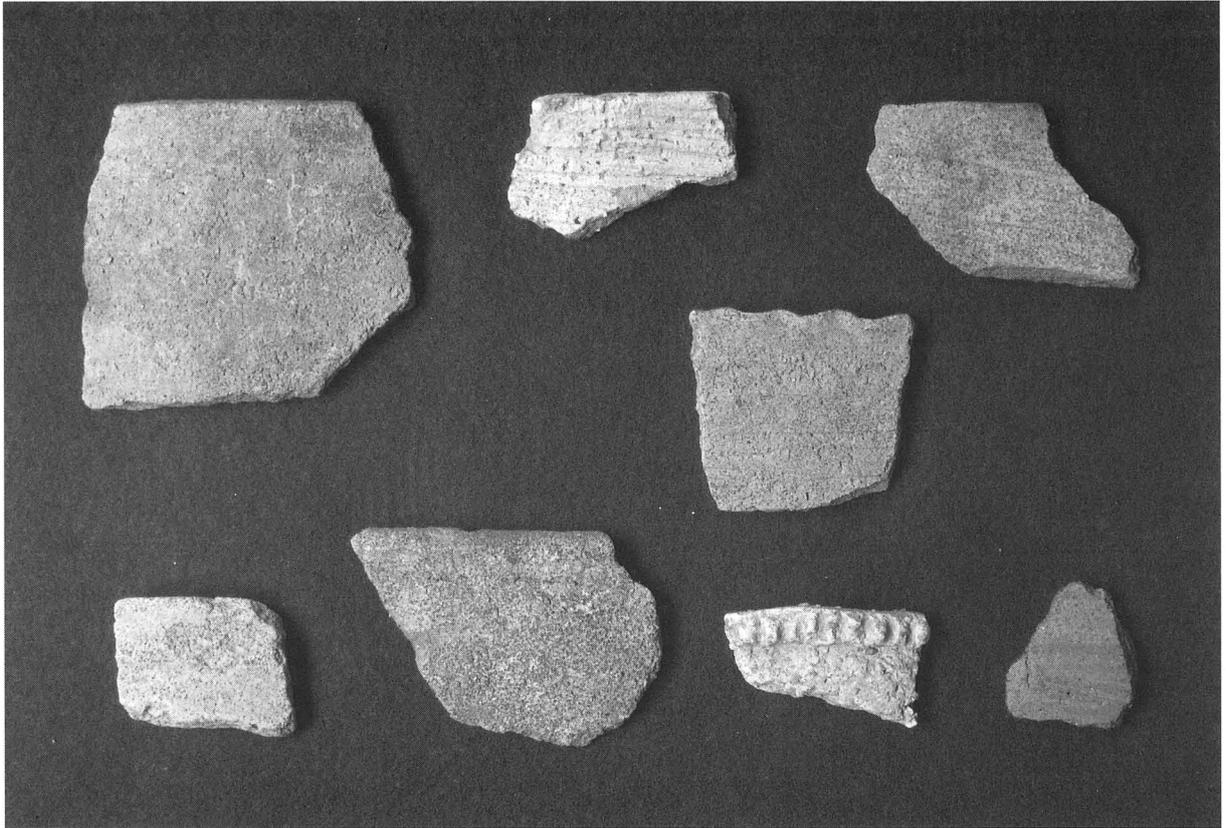
図版14 遺構写真



調査区全景（北西から南西を望む）



SK2 検出状況（北東から南西を望む）



条痕紋系土器



須恵器

報告書抄録

ふりがな	あいちけん とうかいし はたまいせき はくつちょうさほうこく							
書名	愛知県東海市畑間遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	立松 彰・永井 伸明							
編集機関	愛知県東海市教育委員会							
所在地	〒476-8601 愛知県東海市中央町一丁目1番地 TEL052-603-2211							
発行年月日	西暦 2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はたま 畑間遺跡	とうかいし 東海市 おおたまち 大田町 まえだ 前田	23222	43050	35度 1分 6秒	136度 53分 47秒	2001.07.04 ～ 2001.08.29	250m ²	土地区画 整理（区 画街路整 備）
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
畑間遺跡	散布地 (製塩跡)	弥生～近世		製塩土器出土 土坑（弥生） 貝層（戦国期）		製塩土器(弥生) 条痕紋系土器 パレススタイル土器 中・近世陶磁器		

**愛知県東海市
畑間遺跡発掘調査報告**

2004年（平成16年）3月31日

編集・発行 愛知県東海市教育委員会

印刷 株式会社 紙鉄印刷所

